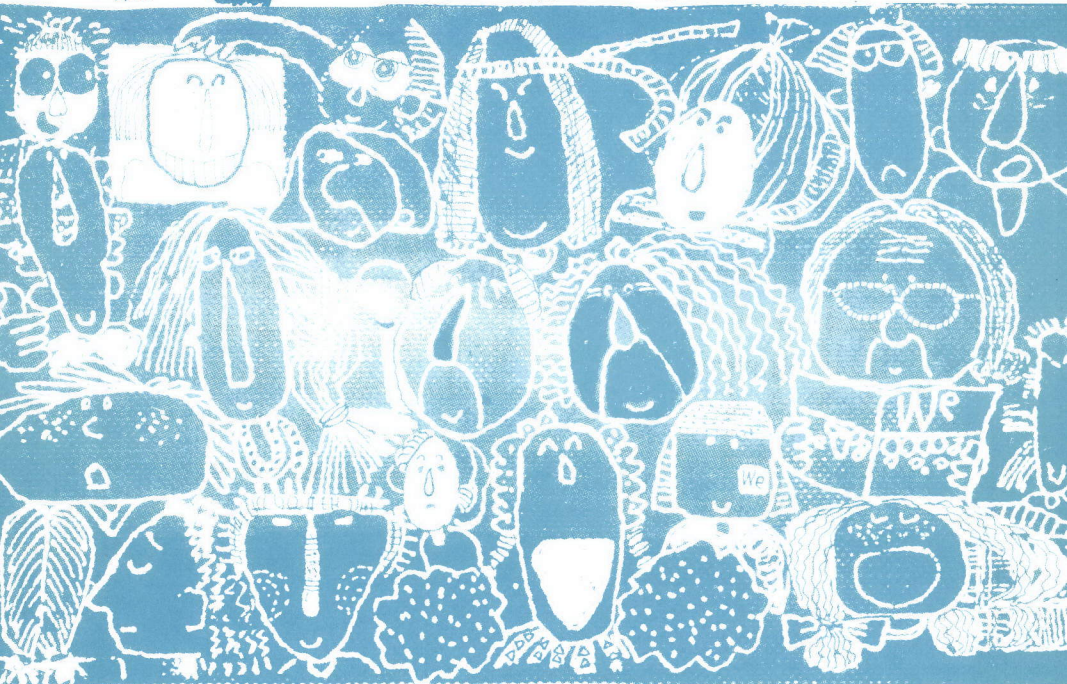


くらしと教育をつなぐ

We

女と男の家庭科新時代



1994
8.9

特集・多民族共生社会を生きるⅡ

インタビュー；松井やより「私がなぜアジアに行くのか」、
ペン・セタリン「私の大好きな国カンボジア」。ひとり
NGO(石名久)、部落差別体験を通してフェミニストに
伝えたい(高橋くら子)、連載；居場所考(水田宗子)他。



くらしと教育をつなぐ

We

8月号

特集 多民族共生社会を生きる II



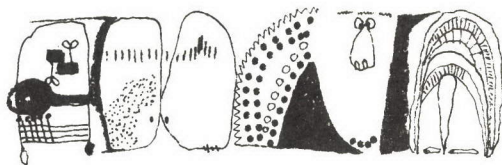
Ta.

《インタビュー》 複眼をみる

ペン・セタリンさん(まとめ/稲邑恭子) 44
「私の大好きな国カンボジア」

連
載

- 四人冗語 武田秀夫 木村栄 津田正夫 野村康子30
- ホスピス千夜一夜物語 森津 純子32
- 木を植えた日 蒔田 直子51
- わがままなま、私のまんま 高木みどり54
- きき耳ずきんの森から 井内 好子56
- 居場所考 水田 宗子58
- オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎61



- ◆ Weの屋台村62
- ◆ 編集後記64

〈インタビュー〉 シリーズ 女・男・家族

松井やより さん (まとめ/中村泰子)

「私になぜアジアに行くのか」 4

特集 多民族共生社会を生きる II

- ☆ ひとりNGO 石名 久12
- ☆ 部落差別体験を通して
フェミニストに伝えたい 高橋くら子19
- ☆ いどばた I N S 横浜26

女と男の家庭科新時代

- 家庭科転職情報《男性編》 南野 忠晴29
- 家庭科—遊ゆう・惑わく
一性を語る— 蔵本 佳子34
- これでバッチリ家庭科玉手箱
小林 由佳 浅井由利子40
- 共学家庭科の窓 石川 尚子42

女・男・家族



私がなぜアジアに行くのか
〜日本女性として考えさせられること〜

松井やよりさん

聞き手／稲邑恭子・中村泰子
まとめ／中村泰子

四月に三十三年間の新聞記者生活にピリオドを打った松井さん。休む間もなく、東アジア女性フォーラムや北京女性会議の準備などで奔走中。その笑顔とパワフルな生き方にすっかり魅了され、「私も何かやらなきゃ!」と、元気をもらって帰ってきました。

まつい・やより

ジャーナリスト。「アジア
女たちの会」会員。アジアと
女性解放のテーマを一貫して
追いつける。著書に『女たち
のアジア』『市民と援助』（共
に岩波新書）など他多数。

◆日本とフィリピンの混血児たち

日本に働きに来るフィリピン人女性性は、タイの女性たちと違って興行ビザで合法的に来る場合が多いんです。ですから、割合自由に出歩けるわけで、日本人男性と交際して妊娠することも多い。しかし、ビザが切れてフィリピンに帰って子どもを産む。最初のうちは男も通って来るんだけど、そのうち捨てられてしまう。そういう母子のケースが今では何万件という数になっています。

その問題の解決を、マニラのバティスセンターというNGOが求めているわけです。まず父親による認知ですね、次に経済的なサポート。バティスだけで既に二百件近い相談が持ち込まれているのに、解決したのは十件にも満たない。日本側では去年JFC（ジャパニーズ・フィリピン・チルドレン）弁護団ができて活動を始めたんですが、資金もなくて。父親の認知といってもまず探さなきゃいけないのに、探すのにどれだけの手間がかかるか。ボランティアで手伝う人もいます。それで、資金集めやその他子どもたちの人権を守るために、「日比混血児を支えるネットワーク」を五月に作りました。女性や若い人がとても熱心に活動を始めています。

その五月に来日したマリコという十六歳の少女は、

「父を抱き締めることが私の夢です。私と同じような子どもたちに夢と生きる希望を持って帰るために来ました」と感動的なスピーチをしました。彼女の父親は海外青年協力隊員としてマニラにいた時、近くの食堂で働いていた女性をお手伝いとして雇って、性関係を強要して、妊娠したら三千ペソ、日本のお金にしたら一万円余りのお金を手切金のように渡して日本に帰り、すぐ日本人の女性と結婚したんです。全く無責任そのもの。でも、マリコは「お父さんに会いたい、会って抱き締めたいたい」という、その願いだけなんですよ。マリコは父親の悪口をただの一言も聞かずに育ったんですね。マリコのお母さんは私に言われました。「シングルマザーであることは辛かったです。でも今はぜんぜん恨んでいません。マリコを立派に育てることが私の義務だから」って。お母さんは下着の行商をしながらマリコを育ててますけど、ほんとに素晴らしい人ですよ。マリコもお母さんを薬にさせたいという思いがすごくあって、大学に入って勉強してお母さんを助けたいと。

日本人の父親に捨てられるという逆境の中で懸命に生

きている子どもたちにフィリピンでたくさん会いました。それと不思議なことに、自分を捨てた日本人の男を恨んだり憎んだりしてる母親はほとんどいないんですね。それだけに、父親の無責任さ、フィリピンの女性を低く見ている差別観を同じ日本人として恥づかしく思いました。

弁護士は、遺棄された母子は最低一万組とみています。フィリピンの日本大使館でフィリピン方式の結婚手続きをしたカップルは8万組にもものぼるというんですが、重婚が多いんです。日本に家庭があるのにマニラで平然と結婚式まであげる。しばらくするとプツンしてしまう。弁護士が捜しても逃げ回る。DNA鑑定するぞ、裁判するぞと言われて渋々対応する。弁護士としては、認知をして、月二、三万円も送れば母子の生活が助かると、それぐらいの要求なんです。沖繩のケースで、企業の駐在員としてフィリピンにいたときに子どもができて、弁護士が連絡を取った時はショックを受けたらしいんですけど、その日本人の奥さんが、「子どもの責任じゃないから会ってあげなさい」と言ったとかで、ジェフリー君という十三歳の男の子に連絡をしたそうです。

私になぜフィリピンの子どもたちの問題をやるべきだ

と思ったかというところ、日本がフィリピンに対して戦争責任さえ取っていない、それを償う一つの方法でもあるからです。かつてフィリピンの女性たちを慰安婦にした日本の男性たちが、今はお金の力でフィリピンの女性たちを性の対象にしている。その結果生まれたフィリピンの子どもたちの問題なんです。まさに慰安婦問題とつながっているんですよ。

◆韓国・フィリピンの慰安婦たち

フィリピンの慰安婦の悲惨さは、ほんとにショックでした。韓国の慰安婦のことは知られていないけれど、フィリピンの慰安婦のことって知らないでしょう。性格が違うのは、植民地の女性を組織的に強制連行して戦地に送ったのが朝鮮人慰安婦です。ところがフィリピンの場合は占領地の女性を性暴力の対象にしたということ。

外地で戦死した日本兵二百七十万人のうち五十二万人が死んだくらい、フィリピンは激戦地ですね。けれど、その倍の百万人以上のフィリピン人があの戦争で死んでいるわけです。抗日ゲリラでいるんなら村で日本軍に抵抗があったけど、日本軍は「無人化作戦」といって、村の人

たちを皆殺しにする作戦を取った。そんなとき、若い娘がいるともったいないといって兵舎に連れて来て、慰安婦にした。それから日本兵が民家に行って、若い娘がいると、「どうか連れて行かないで」と哀願する家族をその場で殺して、無理やり連行した。毎日、毎日レイプして、米軍が近づいて撤退する時には邪魔だと「処分」、つまり殺してしまったわけです。だから私が会った慰安婦はひどい刀傷の残っている人がいました。「処分」されるはずだったのが、血まみれで意識不明になったので、死んだと思われるで放っておかれて生き残った。九死に一生を得たということなんですよ。

ある慰安婦はミンダナオ島の南部で日本軍に囚われて、八か月間地下に閉じ込められて、一度もお日様を見ないで毎日セックスを強要されて、三人の女性が一緒だったけどお互い話すことも許されなくて。ある日、米軍が来て撤退ということになって、まさに「処分」されそうになった時、一人の日本兵が「まあいいじゃないか」と見逃がしてくれたので、全裸で、ポロポロのタオルを一枚巻いただけでひたすら走って家に戻った。村に帰っても二年間は男性恐怖症の廃人同様だった。心配した家族が

いい人がいるからと紹介した人と結婚して、十人子どもを産んで、今はマニラで小さな小さなサリサリストア（雑貨店）をやっています。その旦那さんがほんとにやさしい人でね。新聞で慰安婦の調査をしているという記事を見て、「電話しなさい」と言ってくれたそうです。スラムのようなところに住んでいますが、私が訪ねたとき、家族が一緒に話を聞いているんですよ。本人も涙を流しながら話していましたけど、娘や孫たちが手を握って、「お母さん、頑張って。お母さんが生きていてくれたから、私たちがいまここにこうしていられるんだから生きていてくれてありがとう」って言ってね。

でも、韓国の慰安婦の取材に行くとはんとに気が滅入りました。儒教社会ですから、結婚もできなくて、ほとんどが一人暮らしで、寂しい。韓国の慰安婦は戦争中だけでなく、戦後も五十年近く辛い日々を送ってきたんですね。

フィリピンの慰安婦はほとんどが結婚しています。社会がその人たちの受けた傷や痛みに対して受容的なんです。カトリックの信仰もあるでしょうし、フィリピンの文化は温かさを感じますね。

◆過去を反省しない旧軍人たち

『殺した殺された』元日本兵とフィリピン人二〇〇人の証言』（石田甚太郎著／徑書房）という本に、日本軍が移動する時、囲っていた慰安婦を上司に「処分しろ」と言われて、みんな井戸に投げ込んで殺したという証言があった、その証言した人を探して取材に行ったんです。

「こういうことあったんですか」と聞くと、「ああ、あったなあ。一人気の強い娘もいたねえ」と、平然と何の痛みもなく話すんです。そしていきなり『狂気——ルソン住民虐殺の真相』（友清高志著／徳間書店）という本を持ってきて、いきまいていた。その本は彼と同じマニラ南部のリパの虐殺部隊にいた人が深い反省をこめて書いたんですけど、「こんなこと書きやがって、許せん」と。その中に、ある憲兵隊長が「女性を強姦しても宜しい、けれど必ず殺して土に埋めろ」と言ったと書いてあったので、私が「ほんとですか」と聞いたら、「ああ、そう言っただろうねえ」と。それで「この隊長知っているんですか、会えますか」と聞いたら、「今、腰痛で寝てるよ」って。つまり戦友として今もつき合っていて、反省した人の悪口なんか言い合っているのでしょう。戦

犯として八年間拘束されていた恨みを大学ノート数冊に「奪われた青春」と題して書きためていて、「今でもフィリピン人なんかブツ殺してやりたい」と言うんですよ。そういう男が東京近郊の団地に住んで、普通の市民生活をしている。

でも、彼だけじゃないということですよ。こういう男と一緒に何年も暮らしている奥さんは知っているのかなあと、つくづく思いましたよ。でも、そういう戦争を反省しない旧軍人がいっぱいいる。戦争責任の問題は女性の問題でもあると思うんです。

日本政府は、慰安婦の方たち個人に補償はしないといっています。が、「補償」って一言でも出た途端に抗議の電話や手紙を出すような旧軍人や遺族会の勢力が依然として強くあるんです。だから平気で「侵略戦争じゃなかった、アジアを解放するための正しい戦争だった」なんて、永野発言も出る。

慰安婦問題を取り上げるなどギャーギャー言う勢力があるわけだから、私たちはそれに対抗して、上回るようなことをやっていかないと。ひどいと思ったら、そこで諦めないでハガキ一枚、ファックス一枚でも表明しなけ

ればいけないんですよ。

◆タイ女性の人身売買

慰安婦問題を取材して思ったんですけどね、加害者側にそのように反省がないことが、今、フィリピンの子どもを産み落として平気で捨てることにつながっていると思うんですよ。

タイ女性たちの状況も目をおおいます。彼女たちはほとんどもが人身売買組織で日本に送り込まれ、「不法滞在」の形で、「性奴隷」という言葉どおり、監禁されて、売春をさせられる。タイ大使館に年に三千人も逃げ込んでくるわけですよ。逃げられない人が経営者を殺して逃げるといふ悲劇も起こっている。新小岩事件です。六人のタイ女性が台湾人のママさんを殺して逃げた事件でしたが、そのうちの一人は十五歳の少女で、少年院に送られ、あとの五人は今も裁判を受けている。小菅の東京拘置所は冬も暖房がなく、凍るような寒さです。五人のうちの一人のアケミという名前をつけられていた女性は、仏教徒でね。とにかく貧しいから、家族のためにあらゆる仕事をしたけれど、一度たりとも身体を売ろうと考えたこ

とはなかったって。日本で工場で働く仕事があるからとだまされて連れてこられて、売春させられて。あまりに辛くて逃げようと思って、わずかに二週間ぐらいでその殺人事件に巻き込まれたんです。仏の教えに背いて人を殺してしまったとひどく落ち込んで、「絶対日本に来たらいけない」とタイの女性たちに言ってほしい」と辛い思いを手紙に書いています。支援者の人にも会わないで、喪に服するために白い服と白い花だけ差し入れを望んでいるんですよ。

かつては慰安婦の女性たち、そして今はタイなどアジアの女性たちが、同じように、性暴力の犠牲になってる。五十年たって何が変わったのかと、ショックを受けました。

私自身が慰安婦問題に関わったきっかけは、一九七三年にキーセン観光の問題が出てきた時、キーセン観光反対のグループを友だちと作ったのですが、そのとき韓国の女性から、「あなたたち日本の女性はかつて私たち韓国の女性が日本の軍隊によって慰安婦にされ、戦地に送られてひどい目にあつたことを知っているのか、そのことをどう思うのか」という手紙がきたんです。これは何

かということ、従軍慰安婦の問題を知ったんです。何かしなければと思ったんですが、いかんせんその時の韓国は独裁政権時代だから、民主化運動に忙しく慰安婦問題まで手が回らない。運動がないから慰安婦の人たちは名のり出られない。当事者がいないと運動はできないので、そのままになってしまったんですが、シンガポールの特派員をやっていた一九八四年に、韓国の中央日報に載った記事を読んで、タイに生き残っていた元慰安婦の韓国人の女性にインタビューしたのです。

今までは慰安婦の人たちは一切声を出せなかった、歴史に埋もれていたわけです。慰安婦問題のきっかけを作ったのは韓国の尹貞玉ユンジョンウ先生ですけど、彼女がその声を掘り出していった。彼女は梨花女子大学の教授だったのですが、定年後は残りの人生すべてを慰安婦問題の解決に捧げたいと言われたんです。なぜそこまで慰安婦問題にこだわられたかというと、自分は行かなくて済んだけれど、同じ年代の女性があんな目に遭ったということを、もしこのまま忘れてしまったら、彼女たちを二度殺すことになる。決してそうしてはならないと、頭の下がる努力をしておられます。

◆家庭教育で平和を学ぶ

戦争のこと、アジアのこと、要は教育ですよ。学校教育だけじゃなくて、家庭教育。これがどんなに大切か。私の父は、敗戦の直前に戦争にとられて中国に行ったんですが、帰ってきて、日本軍がいかに中国の人たちにひどいことをしたか、それを償なわなきゃいけないと、まず言いました。

小学校五年生でしたが、すごいショックでした。頭の中にこびりついています。「桶」と「長靴」「防空壕」の三つの話として。「桶」っていうのは、父は北京の近くの部隊にいて、中国人の物売りが出入りするでしょう。態度が気に入らないと「桶持ってこい」と言ってる、桶を持ってこさせてその場で首をはねちゃう、そういうことが日常茶飯事。中国人を人間と思っていなかった。「チヤンコロ」とバカにして。「長靴」というのは、すごくサディスティックな上官がいて、中国人を殺してその肝臓を取り出して、肉片を干して、長靴、軍靴ですよ、その中にしまっていたと言ってます。「防空壕」というのは、作戦である村を撤去させたあと、村の人たちに防空壕を掘らせて、目の前でその中に水を入れて、邪魔だ

と、その人たちを生き埋めにした。そういうことをしたんだよ、と父は私たち子どもたちに反戦平和教育をしたのです。

◆アジアに行く元気になる

フィリピンの女性たちに会うと、日本では考えられないほどの貧困の中にいるのに、たくましく、支え合って生きているし、自分の意見もしっかり持っていますよ。

アジアの女性運動をリードしています。この前東京のある女子大学に講演に行ったんですが、その後の座談会で女子学生たちが蚊のなくような弱々しい声で質問するんですよ。「もっと元氣を出して！」と言いたくなりまして。私など日本では強い女とかいろいろ言われますけど、一步海外へ出るとあたりまえの女と思われて話が通じません。

学生時代、アメリカに留学したんですが、その当時は人種差別がひどいのでショックでした。黒人は奴隷のようになんか扱われて、なんだ民主主義って白人のためのものなのかと思っただけです。そのあとフランスに行っただけですが、旧植民地だったアジアの人々に対しては侮辱的な

態度を感じましたね。フランスも白人男性中心だなあと、ヨーロッパでも失望したんです。

アメリカ、フランスどちらも一年いて、いくら日本がきらいでも、結局日本を何とかするしかないと思って帰ってきたんです。新聞記者になって三十三年間、アジア、世界を取材現場にして仕事をしてこられたことに感謝しています。

★「日比混血児を支えるネットワーク」

〒一〇二 東京都千代田区九段南四一七一―二二一三〇四

☎〇三―三二六四―四二七二

★アジア女たちの会「タイ女性の友」

〒一五〇 東京都渋谷区桜丘一四一〇―二二一

☎〇三―三三六三―九七五二

★『語りはじめたタイの人びと〜微笑みのかげで』（サニッスダー・エーカチャイ著／アジア女たちの会訳／松井やより監訳／明石書店） 急激な工業化・近代化の波に翻弄されるタイの農民たち。バンコク・ポストの記者である著者の淡々とした描写に、かえって心を動かされ、タイの人たちの暮らしに思いをめぐらせた。（中村）

ひとりNGO

石名久



連携し、環境によって形と生態が全く変わってしまう『粘菌』のような活動形態を考えている、とのこと。

*故郷の話から

私は、日本のフィヨルドとして知られる大船渡湾（岩手県三陸海岸）の小さな漁村で生まれ育ちました。

現在、そこは、熱帯地方から運ばれてきた丸太がブカブカと浮かぶ貯

石名久さんは一九四八年生まれの民間企業の技術者。十数年前から、「ひとりNGO」として、アジアの先住少数民族の人々を訪れ、資金援助をしている。

活動の費用（年間二、三百万円）はすべて個人持ちで、妻子も、持ち家も車もクーラーもあえて持たない暮らし。

アジアの先住少数民族に関わっているのは、「その時代その時代にある差別や抑圧からの解放の原理」を追求していきたいから。現在のところ組織を作ることは考えていないが、趣旨を同じくする多くのNGOと積極的に

木場になっていきます。最近では、バプアニューギニアからのものが多く、アフリカからのものもあります。三十年程前はミンダナオ、以後、カリマンタン、サバ・サラワクと変遷してきました。

運ばれてきた木材は船からおろされると、油剤（マラチオンなど、白アリ駆除にも用いる有機リン系の強力な殺虫剤）が散布されますが、それが、海水に0・17%の高濃度で溶けて海を汚染するので、今では、特定の魚以外、魚は見当たらなくなりました。

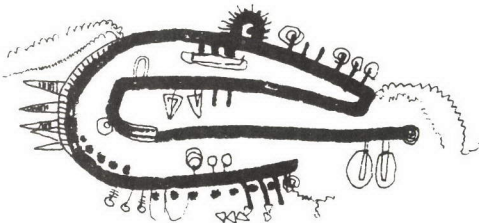
熱帯木材が運ばれてくる前までは、私の家もそうでしたが、ここの集落のほとんどの家庭が、漁業を生業としていました。牡蠣、帆立、海苔、わかめなどの養殖、沿岸定置網を主力に、季節魚、蛸、鮑（あわび）、ウニなども豊富に採れました。蛸と鮑に関しては、乱獲を防ぐために、年に二回指定された日時に漁が解禁されました。

サイレンの音と共に、湾内一面に待機している漁師たちの手から、一斉にいきりが投げられ、漁が開始されるのですが、鮑の場合、小さい鮑は採れてもすぐに海に戻すのが漁師の掟でした。このような掟は他にもあり、子や孫の代までこの豊かな海を残そうという、生活の中から自然に備わった習慣でもあったのです。

しかし、高度経済成長の下で、安価な輸入木材が運ばれてくるようになって、環境は一変しました。国内産木材の暴落に続いて、数多くの小さな木工所などの地場産業の倒産が起こりました。さらに、貿易の自由化が促進され、安価な魚が外国から大量に輸入されるようになるのと、林業と同じように、沿岸漁業の崩壊も急激に進行していきました。

今日私たちが食べている海産物の三分の二は輸入もの

です。海苔は安い韓国ものに押されて、養殖そのものが成立しなくなり、小魚を中心とした沿岸漁業も安い輸入ものに押されて、それまでの水揚げ量では生活できなくなってきたのです。比較的安定していた収入源であった牡蠣や帆立も、湾内汚染が進むにつれて、激減しました。昨年四月、この集落で四十歳の漁師が自殺しました。彼は最後まで残っていた、ただ一人の専業漁師で、主に



ばれた頃のこと、伐採道路ができたことが侵略を可能にしたのですが、今日、その土地は、ココヤシ、パイナップル、アスバラガスなどのプランテーションになり、そのほとんどが日本に輸出されています。

現在、私がコミュニティ建設を支援している集落は奥深い山中にあります。昨年、そのコミュニティ建設も軍隊により壊され、現在は一時中止の状態、様子を見て再開するつもりです。

近くの海岸には、海の民バジャウの人々が住んでいますが、近年は一週間海に出ても、商品になるような魚は一匹も採れないことがあるといっています。沿岸漁業の衰退は日本の大型漁船の乱獲による影響も大きいのですが、熱帯林やマングローブの消失は重大な影響を与えたといわれています。

一般に海の豊かさは植物性プランクトン（海の生物総量の六、七割）の量と質で決まり、特に沿岸域の生物生産量は大きく、親潮の三倍以上で、年間四百g炭素/m²にもなるといわれています。植物性プランクトンの生成には、主に森林などで生物活性を受けた鉄イオン（フルボ酸鉄）が必須とされていますが、禿山が続くミンダナ

オの河川やマングローブの失われた海岸には、こうした生物活性を受けた鉄イオンが少なくなり、大型の魚はもちろんのこと、小魚も急激に減少していったものと考えられています。

現在、日本の「援助」（ODA）による大きな漁港の建設が進められ、住民が知らない間に周りに鉄条網が張り巡らされ、立ち退きを強要されています。隣接する土地にも米国の「援助」で国際空港が計画されていますが、いずれも、IMFが要求している外貨獲得のための開発計画の一部で、日本では開発により貧者もおこぼれに預かるという「おこぼれ論」がある程度通用しますが、ここではそれさえありません。

ある集落では、冷凍倉庫群の建設が計画され、やはり強制立ち退きがなされようとしています。フィリピン式強制立ち退きは無差別に手榴弾を投げこむことから始まり、冷凍倉庫群は、エビなどを冷凍保存しておき高値の時に売るとか、あるいは大量の安売りを行い小さな業者をつぶすためとか、資本家にとっては国際市場を操作するために最も必要とされているものです。炎天下でいくつもの巨大な冷凍倉庫（20m×50m×4m）をマイナス



バジャウの集落

建設にありては、
 環状の海に
 群島の岸
 の一帯に
 庫の施設
 倉庫の外
 凍り得た
 冷たい郊
 区に獲た
 区外（ミ
 地定外）
 がよる。サ

20・5℃に維持するには、大量の電力を必要としますが、この電力を得るために、アボ山の中腹で、先住少数民族の人々を追い払い、地熱発電所の建設が進められていて、ここでもまた、日本のODAが「大活躍」しようとしています。

*天皇制とアジア侵略

私は、本来「国家」も「民族」も、人類の歴史ではほんの一瞬の過渡的概念にすぎないと考えています。日本

を含めてアジアの国々は先住民族の存在を認めていませんが、それは、認めることによって「国家」がフィクションであることがばれてしまうからでしょう。私がアジアの先住少数民族に関わっていきたいと思っっているのは、「国家」や「民族」の相対化は、そのことによつて初めて可能なのではないかと考えているからなのです。

日本民族の形成は、天皇制と深い関係があります。イギリスが国家予算の1/3をアヘン戦争で得ていた頃、清の敗退を知つて縮み上がった日本の知識人たちが「西歐人たちが持つている神という恐ろしいものに対抗するために」、「日本版のキリスト教」として導入したのが、新興宗教としての「天皇教」でした。

明治維新の当時、「天皇」なるものを知つていたのはごく一部の人々だけで、京都市民ですら十数%といわれず。つまり、日本列島の99%の人は天皇の存在すら知らなかったのです。慶応三年の「天皇家」の全財産の現金評価額は十万円強で、商人からもツケで買うような全くの貧乏生活でした。

「天皇教」と結んだ勢力は、それまで様子を窺つていた大商人たちと手を結び、当初民衆革命の様相を呈して

いた明治維新を途中から変質させました。全国各地の氏神をことごとく天照大神に変える「文化大革命」を成功させた後、日清戦争で賠償金二千万円（当時の国家予算の二十％）を自分のものとし、日露戦争後の朝鮮の鉄道筆頭株主、台湾製糖業の第二株主、満州鉄道の大株主といったように、次々に銀行、鉄道、海運業など、主要な産業の大株主になり、侵略をテコに太つていき、ついには一九一七年から一九四五年にかけては、日本でもちろんのこと、世界でも二位以下を大きく引き離れたダントツの資産家になったのです。

アジアに関わっている日本のNGOの活動を見ていて、どうしてもぶつかってしまう問題は、天皇制をどう見るかということです。天皇制こそがアジア侵略に深く関わっているというのに、日本のNGOの九割九分以上は天皇制を批判していないこと、これが、私があえて「ひとりNGO」を続けている最大の理由です。

*終わりに

私は、先に述べたような「相対化」を可能にしてい

ものとして、生命科学の果たす役割には、少なからず期待を寄せています。

例えば、かつて「黒人」を猿と中間の動物と考え、その差異の「科学的証明」なるものがなされていたのが「白人優位論」なのですが、今日では、肌の色の差異はメラニン色素の多少により紫外線を調節してビタミンDを摂取する単なる環境適応の仕方にすぎず、紫外線が少ないところでは、それを多く吸収できるように透過通った皮膚が必要であり、赤道では、その逆でメラニン色素でカットする必要があることが理解されるようになりました。

また、DNAの発見は、「人も草も木も毛虫もカエルも皆兄弟」の關係にあり、それらが喰いつ喰われつつ共存していること、しかもどんな小さな生物でも人間と同等の価値を持つこと、最澄の言うところの「草木国土悉皆成仏」にも近い、アニミズムの世界、いわゆる多次元空間における多次元ベクトルの世界を示唆しています。

かつて、ボルネオの河の民を訪問したことがあるのですが、私の育ったところと共通点がいっぱいあって、故郷のようでもとても懐かしい気がしました。二風谷に行っ

たときも驚いたのですが、アイヌの釣具、農具、丸木舟、すべて、自分が子どもの頃使ったものと同じなのです。東南アジアの少数民族も、山岳民族とはいっても、もともとは海の民か河の民だったのが山に追いやられたのですから、河の民ということ、どこかでつながっているし、言語も似ている。

私はアジアの先住少数民族を訪ねながら、一神教が少数民族の多神教の世界、アニミズムの世界を破壊してきた現場を数多く見てきました。私がよく知っている、アジアの少数民族を支援している神父さんは、神父でないが、少数民族の人たちを一人もキリスト教に洗礼させてはいない。その意味で、従来のキリスト教を超えた多次元の空間を作ろうとしています。

動物の進化の原動力は「病」や「弱さ」であったといわれています。画一化や統一化が起きるとき、DNAはよりシンプルになることで進化の袋小路に入り、環境の変化に耐えられず、やがて絶滅への道を進むともいわれています。

その「弱さ」を保持するために、人間は永遠に画一化や統一化に対する「相対化」を試み、多様性を求め、異

質なものと共存をはかつていく必要があるのではないのでしょうか。

それが、少数次元での、一方向ベクトルになったとき、例えば、英雄とか、正義なるものが出てきたときに、種の滅亡は加速されていくのではないかと思っています。



部落差別体験を通して

フェミニニストに伝えたい

高橋くら子



い出せないが、黄緑色に変色した死顔は焼きついて離れない。父は何を考え、何をしてきたのか、母を愛していたのかについても、想像力はそれを補わせてはくれない。

母は無学だった。母が私を産むために大阪に来た時、小田原から大阪の父の実家までの道順を書いた絵地図を持っていった。父から聞いた通り、母が書き写したものだ。駅名・地名はすべて絵で書かれていたが私の伯

◇プロローグ

私の父は、党に命を投げ出した主義者だった。母の身体に命を宿らせ、生まれくるものに、保証書を発行した。この女から生まれくる子は、真正銘私の子どもである。保証書を発行するだけで、父は地下にもぐり、父としての責任を負わなかった。

父は、私が十一歳になるまで行方不明だった。ある日突然に父は帰ってきた。そして、一年後のある日、農薬自殺である世に逝った。父の常の顔を、私はまったく思

母は、完璧に読み取ることができたという。小田原は、俵の絵の前にカタカナのオがついていた。鶴橋は鶴と橋の絵が書かれてあったという。絵地図と保証書を頼りに、母は大きなお腹を抱えてやってきた。そして私を産んだ。母は結婚しないまま私を産み「無知でふしだらな部落の女」として、産後二十一日目に父の実家を追われた。

祖母は、祖母を抑圧した家を汚すものとして私の母を憎悪し、母につながる私の血を嫌悪した。しかし、一方

で私を溺愛せずにはいられない人だった。祖母は私を、父なし子、母なし子にするのがしのびなかったという。世間を欺いて、私をバイカル湖畔で捕虜になっている長男の実子することにやっきになった。祖母は、長男の帰国後、長男の妻を実家に帰し、私が誕生した体裁を整える工作者になった。祖母は祖母を抑圧した家を守るために、母と私を抹殺した。祖母は、憎しみと溺愛のあいだを行き来して私と向き合った。私を叱る祖母は、決まって「エッタ根性の抜けきらん、この、こせがれ」といって、恐ろしい形相で私に迫り、したたかに叩きのめした。意味を解せない幼児だった私にも、十分すぎる悪意と嫌悪は感じ取れた。しかし、私を吐ったあと、必ず祖母は泣いて私に詫びた。

父が自殺した翌年の秋、祖母はいとこの葬儀に出て、祭壇の前で倒れ、そのまま自分の生家で亡くなった。穏やかでやさしい死顔だった。祖母が私を叱る恐ろしい顔と死顔、人間には幾つもの顔があることを、私は祖母から教わった。しかし、私は不思議に祖母を憎めなかった。

部落の外で育っても、私はおどろおどろしい部落差別

に、ビクビクしながら生きてきた。私を縛り付けてきたものは、紛れもなく部落差別だった。生まれてから三年後、私は赤ん坊としてこの世に存在を認められた。いびつな私の生は、この時からじまった。三年の空白のつけを、私はいつも担いでいた。ここに一枚のクラス写真がある。私が小学校三年生になった時のものだ。一番後で膝を折っている私が写っている。祖母は、私の生にまつわる部分を入籍の操作で打ち消そうとしたが、あどけない顔をしたクラスメイトに交じって、おとなびた私の大きな顔が焼きつけられている。

異様な子、大きな子と世間は噂した。私は萎縮し、足の骨を切って背を小さくできないかと真剣に考えた。裸で身体検査の行列に加わることを拒否し、走って家に帰った。女性の担当が追いかけてきて、「胸が大きくなるのは、恥ずかしいことではないのよ」と説得した。その言葉が空々しく、無性に腹立たしかった。ふくらんでく胸を押さえ過ぎて、授業中に気分が悪くなったことがあった。私を抱き上げようする教師を突き飛ばし、教室を飛び出したこともあった。私はいつも孤独だった。私は私という存在の不自然さ、理不尽ないびつさを憎んで

いた。

四十半ばになって、ようやく私は私の生を冷静に見つめることができるようになった。過去からの解放、それが私にとってには部落解放だった。

◇部落差別、その経験から

私はこれまで、フェミニズムや女性学をテーマにする人たちとの間に、埋めようのないギャップを感じてきた。彼女たちが、部落差別問題は難しい、踏み込めない問題だと遠ざけてしまうことにいらだっていた。私たちが直面する問題を「女性差別」の間尺にすべてあてはめる人たちが。彼女たちに、女性差別と部落差別の違いを考えてほしいと思ってきた。日々の問題は、瑣末な出来事ではないけれど、部落差別の日々の現実こそ知ってほしいと思う。

十年前、子どもがふたりになって、2Kの改良住宅が狭くなったので、部落に隣接する地に家を求めた。引越しの日、私とつれあいは新しい家の近所に挨拶まわりをした。「どこから来られたのですか」と問われるまま

に、部落の地区名を伝えた。私たちが部落からの転居者だということは、すぐに団地中に広まった。

市場で顔も知らない人から声をかけられ、様々に質問を受けた。彼らの関心は、もともと部落の住人なのかにあった。おばあさんの出身地までたずねる人がいた。親しそうに近づく人の意図がどこにあるのか、すぐに理解できた。まさに身元調査そのものだった。隠すこともないので、それらに私は丁寧に答えた。ある人はこう言った。「学校の先生したはるんですね。安心しましたわ」と。何が安心なのかは、おおよそ察しはついた。ある人は「PTAの役員をしたはる□□さんと友だちです。○」（部落の地区名）の人とは親しくしているんですよ」と。同じことを言う人と、私はこれまでも無数に出会っている。しかし、信頼できる人はひとりもいなかった。部落と一般地区である住宅団地の境界は、一枚のフェンスで区切られている。しかも、フェンスを挟んで、一般地区側にも部落の側にも道路が通っている。一方通行でもない道路が中央で仕切られた格好で、厳然と部落と非部落を区切る。それは、道路の問題だけではなく、人々の心にも垣根を作っている。

そこに移り住んでから、私たち家族は一日として平穩な気持ちで過ごす日がなかった。転居から十日ほどたった頃、ようやく周囲の人の新参者に対する好奇心はさめたが、今度は徹底した無視がはじまった。仕事を終えてから部落の中にある保育所に子どもを迎えにいき、ふたりの子どもを自転車の前と後にのせて帰ってくる。それが当時の日課だった。私がフェンスで隔てられた向こう側の道から、住宅団地の入り口にさしかかる。住宅団地の道路は、子どもたちの遊び場だった。道路の片隅で幼い子どもを見守るお母さんたちも、世間話に余念がない。私たちが帰ってくるのをみとめると、お母さんたちは、「ハイ、おうちに入りなさい」と子どもにも号令をかける。蜘蛛の子を散らすように、子どもたちが消え、お母さんたちも消えていく。なごやかな顔で語りあう人たちが、突如無表情な能面に変わるのを見ながら、私の胸は早鐘がうつ。なぜ、と自問しながら通過する時の悲しい孤立感を、今でも忘れることができない。

ゴミの日に、引越しのご挨拶に配った6個入りの石鹸が、封も切らずに捨てられてあった。誰も一言も部落差別を口にするとはなかったが、私は皮膚に鋭利な刃

物が突きたてられたような感覚で、差別を受け止め実感させられた。

露骨な拒否。私はなすすべもなく、疎外され、無視される原因を考え続けた。被害妄想ではないか、私の態度に人を不愉快にさせる要因はなかったかと。部落差別を認めたくはない。できれば現実を見つめたくないという気持ちがあつて、自分に原因を求めようとした。保育所から帰った私の子どもたちは、閑散とした道路でいつも姉弟だけで遊んだ。

私は、差別に負かされ惨めに生きたくはない、と自分を励まし続けた。暗黙の拒絶に怯まず、思いつきりの笑顔をふりまいて「おはようございます」「こんにちわ」と声をかけ続けた。子ども会や自治会の行事には率先して参加した。公園の草抜きや地域清掃は、誰よりも早くでかけ、最後まで決して力を抜かず仕事をした。卑屈になっていたわけではない。彼らにおもねったわけでもないが、彼らを縛りつけている得体の知れない偏見の殻を壊さない限り、私たちは心地よく暮らせなかったからだ。彼らは、次第にこわばった表情をくずし、挨拶を返してくるようになった。友だちと呼べる人もできた。私

は親しくなった友だちに、なぜあんな拒絶が起こったのかを聞いた。理由は簡単だった。部落差別によって、彼ら自身が不利益をこうむっていた。部落が隣接するだけで、家を売る時安く買い叩かれ、新築の購入価格を下回るのだという。パブルがはじけた後の話ではない。当時はうなぎのぼりに住宅価格が上昇していた。売買を引き受ける不動産屋は「私らが差別しているわけではありませんが、中学の校区が同和地区と同じというだけで、買出しぶるお客さんが多いんですわ」と安く見積もった。不動産屋のさりげないつぶやきは、人々の差別心をくすぐり、自分たちに不利益をもたらす元凶は、部落の人々だと錯覚させた。ふりまかれた部落差別は、人々の中にくすぶっていた差別感情を引き出し、確信犯に変えてしまったのではないか。私たちの引越しは、敵視の矢の的の焦点を一層明確にするきっかけだったのではないかと思う。「部落の人と一緒にだと思われるのが、いやだったんでしょ」とは、友だちの言葉だ。しかし、現実には容赦なかった。私の理解者たろうとした友だちでさえ、子どもが中学に入學する前に、そそくさと引越していった。同じように部落差別で不利益をこうむっても、自分

の問題として憤ることのない人は、逃げ出していく。私たちは逃げ場がない。

年末になると、自治会で夜回りがあった。各班から2〜3人の当番が出て、火の用心を呼びかけ、拍子木を打って町内を巡回するお馴染みの光景だ。古い私の部落ですたれた行事が、この新興住宅でコミュニティ作りの手段になっていた。集会場に集合し、夜回りしたあとは、ちよっとした宴会になるのがお決まりのコースだった。

私が当番に当たった日、町内を一巡した男たちが帰ってきて酒盛りになった。酔いの回った一人の男が口火をきる格好で、部落の悪口を言いはじめた。どこそこの子どもが、部落の生徒から暴行を受け怪我をしたといった話から、いきついた話は部落の女性をネタにした猥談だった。男は部落の女性の性器を爬虫類にたとえ、虚実をとりまぜた話に夢中だ。このホラふき男の下劣な話題に、火をつけ煽りたてたのも、大仰な笑いで答えたのも、酒の相手をしていた数人の女性たちだった。

私は怒りで身体の震えが止まらなかった。体験談の体裁だが、男の話はまことしやかな嘘だと察知できた。何人かのお調子者を除いて、彼を取り囲んだ男たちはむし

る、品性下劣なホラふき男に鼻白み、軽蔑の目を向けていた。けたたましい笑いは、私への嫌がらせだった。私はたまりかねて抗議した。「同性がバカにされているのに、何がそんなにおもしろいのか、いいかげんにしなさいよ」と。居合わせた人々の顔が、サーッと青ざめたが、私はそれ以上に青ざめ、身体がガタガタと音をたてた。

ホラふき男は、ことの重大さにやっと気づいたという風に、しょげかえって言葉もない。長い沈黙のあと、ひとりの女性が「酒の上でハメをはずしたことだから、許してあげて」と言った。誰が誰を許せというのか。変幻自在に男を煽り、犠牲者を装って男をエスカレートさせたのは誰か。批判は当然のごとく男に振り向け、叱られた子どもに非に許しを乞う母親のように、大の男をかばってみせる。整合性のない悪意に、よじれた部落差別が見え隠れする。部落の女性をおとしめることで、自らの性もおとしめている事実には、彼女たちは気づいていない。こらえていた私の冷静の歯止めは一気に爆発した。

性的嫌がらせ。感覚的に反吐がでそうな話も、それが部落の女性なら、彼女たちは平気になれる。徹底して無

視し、子どもを遠ざけ切り離し、友だちになる機会を奪った人たちの歪んだ差別感情が、部落の女性を蔑み、好奇の対象にする男の言動を、痛快がらせているのだと思つた。それが作り話だとわかっていても、彼女たちはその愚劣さに応答する笑いで、部落に唾を吐きかけたのだ。部落差別で最も耐えがたいのは、こうした卑猥さや非現実的な話さえ、真実だと錯覚させる力が働くからだ。

部落差別が問題として深刻なのは、侮蔑・忌避・排除されることと、少数ゆえに共に批判する仲間を見いだせないこと。孤立無援が部落の人を追い詰めていく。差別に絶望して自殺する人が多いのは、圧倒的に部落の外に出た人だ。「部落は集団で来るから怖い」と、巷で噂される裏返しの実態がここにある。私も部落の外に出てみて、はじめてどうしようもない孤立感にさいなまれた。部落の中で生活している時、少なくとも孤立感にさいなまされることはなかった。私が真剣に部落解放を考えはじめたのは、フェンスを越えた日からだ。

人類の半分を占める女性が社会的に差別されていることと、絶対的少数者が受ける差別は、同じ差別ではあつ

でも同列の問題ではない。社会問題化した部落差別は、氷山の一角でしかない。私は団地で経験した差別を、結局社会問題化できなかった。何よりも早く忘れ、思い出したくはなかった。ホラふき男は、この問題があつて間もなく、逃げるように引越していった。

こうした問題は、社会問題化しても、根本的な自省や変革にはつながらない。奇怪な偏見を更に根深くし、批判することで「部落は恐い」と印象づける結果しか生まれないなら、悔しくても粘り強く訴えかける他ないと思つた。孤立して闘えないし、かといつて組織にたのめば、私はこの団地でますます孤立を余儀なくされる。いづれも御免こうむりたいから、ひとりひとりに働きかける選択をしたのだ。

◇エピソード

差別・抑圧は一樣ではない。抑圧された者が、より抑圧されたものの重しになる構図。その根本問題に迫らなければ、相互に「部落の男も差別する」「女性も部落を差別する」という次元で感情的に対立する他ない。他者として、高みから底辺の人々を見つめ、性差別に気づか

せてやろう、教えてやろうと思わないでほしい。自らの差別にも謙虚であつてほしい。被差別の男たちの女性差別を、自分たちが主張したいことの立証に利用しないでほしい。被差別少数者の女性の口を借りずに、批判は自分の言葉で指摘すればよい。

この原稿を書くきっかけを作ってくれた女性がいる。彼女から女性学の雑誌に、部落の女性の立場から書かないかと原稿の依頼を受けた。私は一部のフェミニストに對する批判なら書けると了承した。しかし、出来上がった原稿は、痛烈な皮肉と怒りが突き出されていた。私は自己嫌悪に陥つた。書くなら真つすぐに批判すべきだと思つた。締切の直前になって、私は彼女に原稿が提出できなくなつたと断りを伝えた。

彼女は私の自己嫌悪に同情を示した。「フェミニストも様々だからねえ。私もいっぱい聞いてるよ、マイノリティーの女性からのフェミニスト批判は。言わないとわからないのよ。だからこの企画を私は通したのよ」と。私は言つた「あなたへの批判でもあるのよ」と。

(教員)

*私の地方では性別に関わりなく子どもをこせがれという

いどばた…INS横浜

横浜市緑区にある、「INSヨコハマ」（連絡先 横浜市緑区あざみ野2-23-31）という会が、『いどばた』という交流誌を編集・発行（隔月）しています。会の許可をいただき、その一部を以下に転載させていただきました。

*

*

「今、私たちのまわりには多くの外国人がいます。でも、お互いに話す機会もないまま通り過ぎてしまいがちです。話をすることで、今まで見えなかったお互いの心や、不可解に思われた言動がもう少しわかってくるのに。」

昔、水が共同だった頃、共同の井戸のまわりで行われていたようなコミュニケーションが私たちの紙上で行われたら！こんな思いでできたのが『いどばた』です」

「『いどばた』創刊号より」

ナムブラ小さじ3

トウム・アロンサクル（タイ・在日半年）

つい先日、日本人の奥さん方に、タイ料理を教える機会がありました。とても楽しいひとときでした。皆さんとおしゃべりしながら、文化の交流もできました。この時気付いた事が1つあります。

日本人は、数字にとっても正確であるように見えたことです。奥さんたちは、とてもとても詳しい分量を知りたがるのです。例えば、ナムブラ小さじ3とか、砂糖大きじ4、というふうなんです。私たちタイ人は砂糖、ナムブラ、ライム汁……をいれるということだけわかればいいのです。その分量はそれぞれの好みによって変わります。

これは文化の小さな違いのひとつです。タイでもこれまで日本についての大きな情報についてはたくさん研究されてきましたが、こうした小さな違いについては、まだまだ取り上げられていないようです。（原文は英語）

日本のしつけ ブラジルのしつけ

小島ルシア（ブラジル・在日2年半）

ブラジルの母親は子供が小さいとき、子供のしつけをする

のに一生懸命です。もちろん、母親は子供を愛していますが、いいこと悪いことの区別をさせようとし、なにをしいいか悪いかを子供達に示し、イエス、ノーをはっきりいいます。

子供が小さい時からその事を教えるのに十分時間をとりませす。子供が小さい時からきちんと教えていたら、子供達はもつと容易にがまんを理解できるでしょう。

日本の母親は子供が小さい時欲しがるものをなんでも与える傾向があり、子供達は甘やかされ、わがままになりがちです。日本の若い世代の人達は子供のしつけ方をもつと学ばなければいけないと思います。

日本の学校制度はいいものですが、もし子供達の教育を学齢まで待つていたら、子供達はもつと大変になります。

(原文は英語)

「リンゴがすきじゃない？」

孫 欣 (中国・在日2年半)

最近私は少し日本の主婦と付きあう機会があった。前、日本人の生活面がよくわからないので、付きあい中何回も日本の友達を困らせることが起こりました。次に話をするのは私と日本人間に起こったことです。

ある日、日本人の友達が私の家にきました。ちよつとあいさつしてから、家にはいつていただきました。友達がきたのは私にとつてとてもうれしいことです。私は国の習慣にしたがつて、すぐ茶を入れて、冷蔵庫の中から特に格好がよくて大きなリンゴを選んで、皮をむいてまるのまままで友達の前において「どうぞ、召し上がつてください」と言いました。しかし、そのときに友達はずつとリンゴを眺めたのに手が動きませんでした。只何か話したそうな顔をしていました。私は何か失礼なことをやつたんだと思いました。どうしてそんな顔をしていますか。私は気が短い人なので「リンゴがすきじゃない？」と直接に聞きました。「いいえ、リンゴは大好きですよ。あのね……」と言いながら、どんなふうにしたらしいかなと考えている顔を見られました。「ナイフを貸してください」と友達は言いました。友達はナイフで丁寧にまるのリンゴを8つに分けて1つずつ中の種を取り除いてきれいに皿に並べて「こんな形は食べやすいでしょう」と言いました。友達のほんとうの意味はいままでようやくわかりました。

実は、中国人がお客さんを招待する方法は日本人と違います。皮をむいたまるの果物で、お客さんを招待するのは普通

のやり方です。もし果物を何個も分ければ、相手に自分がけちな人と考えられるかもしれません。自分がお客さんに招待の誠のある気持ちを表すためにいつもたくさんのもを用意して食べさせます。多くの人はそんな気持ちを持つているから、リンゴなどあまり分けません。梨を分けることは中国語で「分裂」と言います。これは漢字の分離と同じ読み方です。すなわち、家族と別れるの意味です。家族にとつてあまり良くないことです。日本人は何をしても、まず相手に便利を感じさせます。いつも手をかけてきれいにします。これはいい習慣だと思います。私は日本人から、いい生活習慣を受け入れたいです。今から勉強する事がたくさんあります。

(原文のまま)

日本のホストファミリーへ

ダノップ・D (タイ)

(日本に2カ月滞在し現在アメリカに留学中)

お元気ですか。

ぼくはアメリカでの生活にもだいぶなれてきました。問題だったこともほとんど解決されています。又もとの「天下パーソン」に戻りました。長い間失われていた自信をとり戻

しました。あなたのお手紙のおかげです。

「タイの人々は昔の日本人のようです」と言うあなたの言葉に「ぼく(昔の日本人)」と「アメリカ人」の違いを考えました。

そしてどうしてアメリカ人はぼくの感情を傷つけるのか、とうとうわかったのです。ぼくの欠点はほかの人の気持ちをあまりに気にしすぎることなのです。ぼくはほかの人の気持ちを傷つけたくないし、悪いことにほかの人からも同じように扱われたいのです。

しかし大部分のアメリカ人の若者はぼくの親切や感情など気にかけないし、彼らはほかのアメリカ人に対しても同じように接しています。

ぼくはあまりに他人の気持ちを気にしすぎるといことがわかりました。でもこんな単純なことでもすぐ忘れてしまいます。なぜならぼくは国全体が家族のような魅力ある王国——そこではみんながお互いのことを気にかけている——で生まれたのですから。

でも今ではアメリカ人の気質も理解し受け入れることができ、いらだつことがなくなりました。もう大丈夫です。いろいろありがとう。(原文は英語)

家庭科転職情報 《男性編》

南野忠晴

7月5日、今日で一学期の授業もすべて終わり、明日から期末テストだ。本当にあつという間に一学期が終わってしまった。こんなに早く夏休みを迎

えるなんて教員になって初めてだ。考えてみれば、4月から色々あったような気がする。足の骨も折ったし、テレビの取材もあった。講演会のような

のにも幾つかよばれた。調理実習も各クラス2度ずつやったし、授業のことで悩みもした。生徒の名前も全然覚えていない。なのにもう夏休み。

「南野さんならきつとすてきな授業をするんでしょね。私も受けてみたいワ。ウツフン」

などと言えるような授業はお世辞にも全くなかった。そこへ持ってきてテストである。テストのことなんか正直言っても考えないで授業をしていたし、♪授業は生徒と僕とで作るもの、なんて鼻歌交じりの部分もあったから、ちよっぴり凍ってしまいました。いや、本当。

でも、幸いにといふべきか、試験問題は僕が作るようになった。何とかごまかせるといふものだ。でも、気分が乗らない。それでも何とか作ってしまった。家庭科でペーパーテストをする

意味って一体何なのでしょね。しばらく時間をかけて（十年くらい？）ゆっくり考えてみることにしよう。でも、何といつても気分はもう夏休み。今は、そんなことは全部忘れることにします。

今の不安は時間の経つのがとにかく早いこと。家庭科ってこんなに時間の経つのが早いですか？ このままじゃあ、あつという間に定年退職を迎えてしまいそうな気がします。

「好きなことをやってるときって時間の経つのを忘れるっていうじゃない。南野さんって家庭科が好きなんだよ、きつと」。

ああ、もしかしたらそうなのかもしれない。今まで、学校で家庭科を教えたいとは思ってきたけど、自分が家庭科が好きなのかどうか考えたことなかったものね。実を言うと、ほんの少しだけ2学期が楽しみなんですよ。

「あんた！　いくつ？　21歳？」

鋭い女性の声の後ろであがりました。

「どうしてそんなこときくんですか」

背中合わせのベンチに座っているらしい若い娘が静かにそう応え、煙草の匂いがふっとしました。

「これから赤ちゃん産むでしょ！　煙草なんか吸って」娘の前に立ちはだかった老婦人が叫んでいます。私は身を固くしながら、それ以上言い募るようなら何か言わなくてはと思っていますところへ電車が来ました。皆が立ち上がり、くだんの老婦人は意気揚々と階段の方へ歩いていきます。ナップザックを背負い、自然探訪といったスタイルで。娘は顔を赤らめて車内に入りました。

翌日、朝日の投書欄に、図書館の喫煙所で煙草を吸っていたら「植物が可哀そうでしょ！」と男の子に睨まれたという人の文章が載りました。「軍国主義」という言葉がその中に見えましたが、私は苦笑しつつ同感しました。——「戦争」は、娘をたしなめる老婦人の鋭い声、大人を睨む小学生の潔癖な目の中にすでに兆している！

(T・H)

「正しいことを言うときは相手を傷つけやすいものだと気付いているほうがいい」

娘の結婚式に娘のリクエストで朗読された吉野弘の祝婚歌の一節です。思い当たることがあって苦笑しながら聞いていました。

私は何故「フェミニスト」になったのかときかれることがあります。男も女も自分の食い扶持は自分で稼ぐ、自分のことは自分でやり、自分の子は自分で育てる。それが平等だと信じて、現実との落差に苛立っていた民主教育一期生が出会い頭に意気投合したのが「フェミニズム」でした。私にとってはその単純明快な正論が魅力でしたから、何故主婦に受け入れられないのが不思議で、やっきになって性別役割分業を否定していたものです。

感情的な主婦の反発は、反論のしようのない正論によって「懸命に生きた半生を容赦なく切り捨てられた」生身の悲鳴だったのかも知れません。

娘は「専業主婦」を選びました。それが娘の親離れの形だったようで、それも又よし民主主義、自立への道は十人十色というのが私の心境です。

(K・S)

四

人

武田秀夫
木村栄



冗

語

津田正夫
野村康子

痛動電車などといわれるモノに毎日乗ること十三年余、現在は二種類×朝夕で日に四回利用する。そこで見聞・体験するドラマティックなシーンはさまざまだが、目をつむったりその場を離れてやりすぎず不愉快シーンは日に二つや三つはある。どうしても黙っていられない不愉快シーンというのも、月に二つや三つはある。

よくある例で、満員電車の中で一人の若者がウォークマンをガンガンならしていたりする。みんな顔をしかめているが、へたに注意してトラブリたくはない。僕は実に物好きにもこれにチャレンジすることいくたびか。下手に注意して一触即発の場面になったこともある。長い経験から、今ではにっこり笑いかけてボリュームを少ししぼるゼスチャーをすることで、ほとんどの場合解決することを学習した。外人がよくやるアレである。

ところが簡単なようで、これが結構めんどうくさい。ブスッと注意したほうがキザに見えないし、日本人のやり方のような気がして、あとでやはり後悔する。どうして日本人同士って、特に男はこうもブスツとなるんですよ。人間的な甘えがミエミエですよ。(T・M)

休日に電車に乗るのは、大嫌いです。ハシヤグ幼い子ども、二人の世界に浸っている若者、足元の定かでないシルバー族、大きな声でしゃべくり笑いこけるオバン軍団……コンコースを歩くスピードも向きもバラバラで、イライラします。朝のラッシュアワー時の同一方向に向けた整然とした緊張感が懐かしくなってしまうのです。

もしかして、働くことが善で遊ぶことは悪と感じる「マジメ」な性格のせいかもしれません。さらに白状すれば、私自身の中に統一性や効率の良さに美を認め、混沌を憎む危険な芽が潜んでいるのです。そのことを知ったのは、「ファシズム」の歴史を学んだ時です。

以来、大きな流れには疑問を抱き、マイナーな存在を見過ごさないように訓練してきました。たとえば、同性愛者の権利に敏感であろうとしていたつもりです。だのに、最近編集した若い女性のための本でレズビアン視点点をスッポリ抜かしてしまいました。それも読者カードで指摘されるまで気がつかなかったというお粗末さ。

喫煙する若い女性にお説教する正義のオバサンって、実は私かもしれませんよ、武田さん。(N・Y)

「よお、森津。いいところに来たな。ちよっとお願いがあるんだけど」

ある日、同僚の外科のドクターからお声がかかった。

「なあに」

「外科にさあ、痛みの強い患者が二人ばかりいてさ。そのAさんとBさんの痛みを取ってほしいんだけど……」

「お安い御用よ。はいはい、わかりました」

「あ、ただね、Aさんには絶対お前の顔を見られないでくれよな。それからBさんのところへ行くときも『今晚、私が当直なので、ちよっと顔を出しました』ってな顔をして、絶対、俺達が依頼したというのがバレないようにしてくれよな」

「なによ、それ」

「いやー、みんなお前が来るのを怖がってさあ。Aさんなんて、

『森津先生が呼ばれた患者は必ず死ぬ。もしかしたら、もうじき自分のところにも森津先生がくるんじゃないか』なんて言ってビクビクしてるんだよね。さすが死神ド

ホスピス物語 一夜千夜

森津純子

クター。さすがキリコちゃん」

「なによ、その『キリコ』ちゃんって」

「知らないの？ 手塚治虫の『ブラックジャック』っていう有名なマンガに出てくる殺し屋のドクター」

「なに、じゃ、私は死神か？ 殺し屋か？」

「だってそうだよ。人を楽に死なせるのがお前の仕事だろ」

「あのねー、私の商売は、『人殺し』じゃなくて、『残された時間をいかにより良く生きてもらうか』ってことなんだからねっ！」

「ま、なんでもいいよ。じゃ、頼んだからな」

と、外科のドクターは言いたいことだけ言い終えると、憎たらしいほどの爽やかな笑顔を残してサツサと立ち去っていった。

「私は死神じゃないのに……殺し屋でもないのに……ぶちぶち……」
文句を言いながらも私は外科病棟にむかった。

「Bさん、今晚は。初めまして。」

今晚の当直の森津と申します。ちよつと具合がお悪いのだそうですね。看護婦さんに頼まれてきました」

「ああ、ホスピス病棟の先生ですね。昨日まで具合が悪かったんですけれど、今日は調子がいいんですよ。わざわざ、ありがとうございます。」

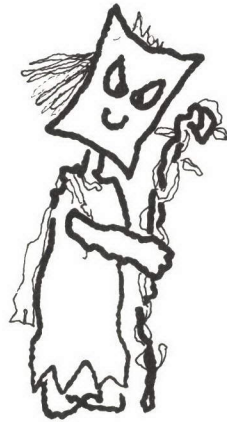
ちよつど今、誰か来てくれないかなあつて思つていたところなんですよ。なにしろ、病院の中にばかりいると退屈だし、寂しいし……。なんか、悪いことばかり考へちゃつてねえ……」

「そうですよねえ。看護婦さんもお医者さんも、『具合はどうですか』しか言わないしねえ」

「ほんとに、それだけで重病人になつたような気がしますよ」

うんうん、と頷きながら、他愛もない話を続ける。

「ところで、先生の病棟に行くの大往生できるんだそうですね？ 私もそんな時がきたら、ぜひ、入れてください」



いよ」

「そうですね、いつかそんな時がもしきたら、いつでもいらしてくださいね」

「いやあ、安心したな。これで私でもし死ぬ時は、大往生が約束されたわけですね。先生、これを機会にたまには私のところにも顔を

見せに来てくださいいよ」

「光榮です」

未だ告知を受けておらず、それでも、日々進み行く自分の病状に不安を抱き、「死」の影に脅えるBさん。私はBさんと話しながら、

「外科病棟では、私は優しい死神さんになつてやろう」と心に決めた。

性を語る

東京都立稲城高等学校
蔵本佳子

*初めに

共修初年度に産休育休に入り、今年度より復帰。休職中の充電をもとに、最も関心のある性の授業から始めることにした（男子を交えての性教育の授業は初めて）。

核としたことが二つあった。一つは『暮らしと教育をつなぐWe』九十三年十一月号、『新しい家庭科We』九十一年六月号の竹内未希代さんの実践。そして、橋本治の『僕らのSEX』（集英社）の中にある、「人間はSEXをすれば死ぬこともあるし、人の親になってしまいうこともある。これだけは揺るぎのない事実で、これが一番肝心なことです」という一文に込められた、筆者の言う「生きる上での覚悟」ということ。

家
庭
科
遊
ゆ
う
惑
わ
く

最初の時間は題して「性器の主人公になろう」。まず、初対面のムードづくり。クラスも二年生になり再編成したばかりで、まだぎこちなく、そこでいきなり（生徒曰く）エッチな話に入るのだから、こちらも緊張する。

まず、アンケートから入っていく。内容は性器の呼び名から入り、性交のイメージ、月経（女子）、マスターベーション（男子）についてたずねたもの。「なんだよ、これ」。男女の質問が違うので、互いに見せっこしてクスクス笑っている。

そのあとで、竹内さんの十一月号の授業実践を取り入れて、手遊びを使って、外性器の成り立ちと機能比較の話をした後、女性の内性器のリズムと自然の話をする。

二回目の授業は、アンケートの集計をもとに「性受容」の授業に進む。月経とマスタベーションをとりあげる。

マスタベーションの問題は、男女共に一つのキーポイントになると思ったので、自分自身、小学校六年生頃、押入から見つけた性体験の書いてある雑誌を読んで、自分は性的な存在であることを強烈に意識した話をした。クスクス笑いながら、うんうん分かるとうなずく顔。快感を感じてしまう自分を貶めることなく、マスタベーションは「性的な自分」を意識するからだの自然な要求であり、成熟の訓練であるという、橋本治のプリントを次に読んでもらう。

マスタベーションについては、反応が大きかったが、一人の男子にこんなことを突きつけられた。「言っていることはだいたい分かっていたけど、感じたことを書かなきゃダメですか？ 自分で思っただけではダメですか？ 言いたくないことっていっぱいあるし、あんまり先生にこんなこと知られたくない」。

私は考え込んでしまった。私は、かつて生徒たちに聞かれて困ったことがあった。「先生、初体験はいつ？」

「私たちには聞いているのに、先生が答えないのはずる

い」と。

*音楽の中の生と性

三回目の授業はこの意見について答えていく。村瀬幸浩著『男性解体新書』（大修館書店）を参考に、マスタベーションを自分のからだをいとおしむこと、性交を互いに楽しみを共有することとして語り、プライベートな領域、侵害してはならぬ領域ということについて、話していく。真剣な眼差しがあった。

そしていよいよ、性交へのステップを踏むとき、女と男は何を感じ何を大切にしているのだろうか。竹内さんと電話で話したときに出てきた「性交をどういうふうな生徒に話すか、これがなかなか難しいのよね」を思い出しながら、その行為の裏にある様々な情感を味わってみたくなり、以前やつて好評だった音楽を取り入れての授業を試みることにする。

尾崎豊の「I Love You」は悲しく切ない若者同士の互いに温め合って生きていこうとする性描写。初恋のときめきを表現した小学生の詩「夕鶴」も人気が高い。古事記（沼河姫の歌）や万葉集の歌にみられるおおらかな

性描写。性交後の余韻に浸る女のエロティシズムの歌（「朝寝髪吾は梳らで愛しき君が手枕触れてしものを」）に山口百恵の「闇の香り」という曲のイメージがびつたりと重なり合い、「すごい浸っちゃった」と言う女子。「女性性は性交の後をも大切に思っているような感じがする」という素敵な感じかたをする男子もいた。

森山良子「手の中に……」は、玉置浩二とのデュエットで、絶望の果てに出会った二人が、勇気と希望を胸にうたい上げるドラマティックな曲。高村光太郎『智恵子抄』の「僕等」、谷川俊太郎の『女に』の「名」、「腕」、「ともに」などの膨らむイメージの豊かさに驚く感想。

与謝野晶子や伊藤比呂美などの出産や陣痛を表現した文（高柳美知子『文学の中の生と性』）に、男子が書いた感想も楽しかった。

そして、この授業に触発されて、CDを持ってくる女子がいた。聖飢魔IIの「精神の黒幕（リピドー）」。「これは、セックスの本音と建て前が交互に取り入れられた詩がロック調のリズムに乗って、スリリングに展開されていくもの。題して「奪う性」。加えて、「与える性」として、山口百恵の「ひと夏の経験」も後半のクラスで

は流していく、曲を流すと、さまざまにイメージが膨らみ、言葉に表現できない情感の世界が教室いっぱいになる、楽しい時間だった。「守ってやる、その身をおびえないで、飛び込んでこいよ。（奪ってやる、その身を俺の手で陥してみせる）」といった歌詞に対し「奪い犯す性」という罪悪感を感じた」「男の誰にもあるような、陰のことがすこくよくでた歌」という男子。「なんか、すこく面白い。遊び心いっぱい」「どこかに守ってほしいって思う反面、奪ってほしいって考えるもの」という女子。

*性の呪縛を考える

しかし、せっかく音楽を取り入れたことで膨らみかけてきた風船だったが、せっかくのところではシューッとしぼんでしまった。次のステップは明らかに失敗だった。

四回目の授業は「セクシュアリティはどうつくられるか」と題して、男性性の呪縛について話した。伏見憲明さん、葛森樹さんの文章、メンズリブの理論を紹介し、男らしさとは「勝つこと、成功すること、そして女を侮蔑すること」（伏見憲明）が条件となっていて、性行動

にもそれが力関係となつて現れてくるという話をした。女らしさの呪縛には反応した女子とは対照的に、男子には手応えなし。私は考え込んでしまった。

目の前の生徒たちは、私が思うほど、男らしさ女らしさの規範には縛られてはいない。特に、男子は早々と男らしさのレールから降りているようだった。むしろゲイの人々の世界に触れて、そちらに関心が向かつたようだった。そういう「らしさ」の呪縛にはまるのは、ある種、エリートコースに乗れてしまう優等生なのかもしれないと思つた。

*エイズを考える

五回目は『私を抱いて、そしてキスして』の鑑賞。この映画は高校生にエイズを身近な問題として捉えてもらうのによい映画だと思う。タイミング良く、衿野未矢というノンフィクションライターによる的確な批評（まじめないい映画だが、セーフセックスのための配慮がない性描写に「？」）が手に入り、プリントして、希望者に配る。この批評をもとに、ふたつの質問を投げかける。

「なぜ、圭子はエイズであることを隠して、高野と性交

したのか。こんなにも愛している相手がきれいなからだのままで去っていくのがつらかつたという言葉をどう思うか」「エイズ以前になぜ妊娠を配慮した避妊をしなかつたのか。そのことに違和感を覚えないことは危険ではないのか」

WE六月号の「エイズと性」特集は大いに活用できた。大石さんが言う、「なぜ、セックスにおける危険な行為がやめられないのか」。大沼さんは言う、「ノーを言えない自分。どうやって自分のからだを自分のものにしていけるだろう」。

折りよく、九三年十二月武道館でのエイズキャンペーンコンサート収益によるパンフが届いていた。これはエイズの予防知識に留まらず、性をエイズによって歪められてしまうことへのメッセージが入っている点で、他の諸々のパンフとは違っていた。生徒たちは熱心に読んでいた。「私たちはエイズにならないために生きているのではない」「私たちがセックスに關して守らなければならぬルールが一つだけある。それはセックスをするふたりが不幸にならない配慮をすること」「セックスがすばらしいものだから、HIV感染を予防する知識を」

(パンフより)

ある女子の意見に対して、何を感じるか、特に男子に
対し呼びかける。「好きだったら、ここらからだを一
体にしなくてはならないのか。好きでもやっぱり性交の
方が抵抗はあると思う。男は抵抗がないのだろうか。私
の場合ちよつと違う。好き⇨性交はなんとなく校則みた
いに決められているようで嫌だと思う」。

これに対する答が、私は生徒達の反応の中で一番好き
だった。それぞれの性交観が個性豊かに、短い文ではあ
ったが現れていた。性の体験が当然の通過儀礼のようにな
っているからこそ、彼女の率直な感じかたに、新鮮な
ものを感じたし、それを茶化すことなく誠実に答えよう
としていくクラスのムードに爽やかさを感じた。

*授業を終えて

授業をしながら、私の中で、だんだんふくれあがつて
きたテーマがある。それは、「性受容」ということ。体
を貶めることなく、からだの要求と成熟ということを素
直に受け止めて欲しいと思った。

だが、授業する教師の側の性受容のありようによつて、
メッセージの内容が微妙に変わってくることに気づいた。
産める性として産まれてきたこのからだを、そして女に
まつわるもろもろの規範を、どう受けとめているか。出
産や月経の痛みは、女である自分の受容の仕方、かな
り変化すると聞く。そして、自分に一番近い大人の女性、
母親の影響力も測り知れないという。

授業中眠っていたり感想を書かなかつたり、関心の低
い男子がいる。休み時間に廊下で群れながらプロレスし
たり、お弁当を食べたり、そして大声で猥談を繰り広げ、
挙げ句の果てに等身大のヘアヌードのポスターを壁に張
り付け、私の怒りをつけた。その反応を彼らは楽しんで
いる。エイズを取り上げても、ある男子は感想に「外国
人売春婦には気をつけよう。三万円という言葉に気をつ
けよう」などと書いてきたのでコメントをつけて返した。
彼はじつと読んでいたが、クシャクシャポイ。しかし
個人的に話すと結構人なつくくつて、ハートの温かい子
が多い。しかし、男の子集団になると、とたんに暴力性
を帯びてくる。皆でやれば怖くないらしい。そして猥談
は関係づくりに不可欠らしい。

ある日、その集団は被服室の椅子を持ち出して、壊してしまつた。昼休みついに押し問答になり、頭に血が上つた私は、いいチャンスなので、後でじっくり話し合うことにした。暴力的なことに対して敏感になつて欲しい一念で話した。しかし、また翌日になると、ボール遊びをして、家庭科準備室のドアにあたり、怒鳴られている。

授業が進行しているとき、ある、私の担当以外の女子が準備室にやつてきて、排卵日予測の方法を詳しく教えて欲しいという。こういう時、いかに、授業中本気で話を聞いていないかを思い知らされる。そのときにならなると、考えないというのは私もそうだから、人のことは言えないけど、大切なことが伝わっていないことに本当にながかりするのだ。しかし、一対一になると、かえつて張り切つて、女同士本音で話せる。「望まない妊娠におびえながら、性交をしないのか」、「子どもを産む、親になるってどういうことなのか」。私の思いを話してみる。

その場には二人の同じクラスの男子が同席していたのだが、話を聞きながら、ときどき口をはさむ。面白いと思つたのは、彼女は私の意見にうなずきながらも、決定

的なアドバイスとしては次の男子の一言が利いたようだったこと。「俺は好きな子だったら、そんなことしないぜ。男は一度そうになると、止まらなくなるからな」。

狙い定まらずスタートし、何が起るか予想がつかない展開だったが、かえてそのことで適度な緊張関係が生まれ、楽しくやれたのではないかと思つている。

生徒の授業する側も、受ける側も、自身のセクシュアリティについて、知らず知らずの内に考えたり話し合えるようになったことが嬉しい。

男社会への恨みつらみを教師から直接ぶつけられてしまうと、生徒は苦しいと思う。かといつて、生徒の感覚にびつたり沿つて楽しむだけだと、馴れ合いになつたり、いわゆる真面目な子を疎外しがちになつたりする恐れがある。問題意識を持ちながら、それを押しつけるのではなく、生徒の発言の中にどれだけ響き合うものを見つけ、引き出していけるか。その適度な緊張感を作っていくことがなかなか難しい。その意味では、こちらの予想を裏切り、反応がいまひとつというときに、勝負のしどころなのかも知れないと思う。

を取ってみれば？」って感じなら、ちょっといいかもしれない。

次は助産婦さんの指導による妊婦体操、呼吸法、リラクセス法。みんなで「ヒッ、ヒッ、フー」です。

最後に5つのグループに分かれて、沐浴実習。ベビーバス、ガーゼのハンカチ、石けん、タオル等が用意してある。保育人形（体重3kg、身長50cm）を使って、保健婦さんが実際にやってみせながら説明する。小人数ということもあって、ここでは具体的な質問が次々出ていた。続いて参加者ひとりずつ実習する。しかし、夫婦で参加している場合は「じゃあ、お父さんにやってもらいましょう」と、夫だけが実習。これは先ほどの話でできたように「沐浴はお父さんの役目」であり、それを習慣づけるためか？！ お父さんのほうが手が大きいから、赤ちゃんの耳を押さえやすいし、お父さんに向いてる？

保健婦さんから高校の家庭科の先生であることを紹介されると、ある妊婦さんに「高校生でも妊娠する子がいるだろうから、そのためにも、こういう実習、必要かもね」と言われた。う～ん、そうかなあ。大阪の府立高校では、介護実習や保健実習のできる部屋、総合実習室を各校に設置しつつある。そして、保育人形も備品として整備され、沐浴実習をしろさいということのようだ。でも、高校生にとって、沐浴実習は本当に必要なのだろうか。

「今日はたくさん（夫が）来はると聞いていたのにだまされたなあ」と言っていた男性が、楽しそうに沐浴実習をし、わざと人形の首をぐらぐらさせてみたりしている姿を見て思った。高校生には、沐浴の方法を教えるということに重点をおくのではなく、ワーワー言いながら、保育人形を抱いたり、さわったりしながら、それをきっかけにして、男女で子育てについて考えていくことができれば、それも一つの方法かもしれない。

それに、この講座に参加した男性はエライかのように、ほめられていたが、「参加」なんて優雅なこと言っていないで、「育児する男」を特別視せず、それがあたりまえになればいいのに。男女が一緒にいる教室で、あなたなら、どんな保育の授業をしますか？（まとめ 浅井由利子・小林由佳）

『パワー全開！！ 赤ちゃんのお通～り！！』（おかべりか／主婦の友社）おもしろかったです。



家庭科玉手箱 …… 浅井由利子 林 咲子

これまで妊婦さん対象に行われていた保健所の「母親学級」が、3年ほど前にリニューアル、「パパ&ママクラス」に。1コース3回。3回目は夫と同伴というこの講座に妊婦経験なしの私たち3人が参加?!しました。担当の保健婦さんによると、「体験すること。仲間づくり。パパへの育児参加呼びかけ」がこの講座の大きなねらいだそうだ。

さて、今回の参加者は30人。そのうち男性は6人で予想していたよりカップルが少ない。(いつもはもっと多らしい)。ほとんどが初めての出産を控えている人たちで、妊娠月数はいろいろ。予約する必要もなく、自由に参加できる。1、2回めには、グループに分かれて交流会や産婦人科医に質問したり、ビデオを見たりしたとのこと。平日の1時半から3時半だから、男性が参加するには仕事を休まねばならないし、働いている女性は参加しにくいだろう。

まず、両親の役割について講義。講師は、知的障害児の早期療育施設の男性指導員。みんな静かに聞いているようだが、ねむそうな顔。「お母さんまかせではいい子は育ちません。お父さんがやるべきことは、子育てに細かいことでは口出ししないで、お母さんにアドバイスしたり、支えになってあげることです」「赤ちゃんをおふろに入れることを最初に習慣づけて、お父さんの役割にできるようにしたらいいですね。そしたら会社からすぐ帰ってくるようになります」。要するに「男は仕事、女は家事・育児」が基本で、父親も少しぐらいは参加しましょうということらしい。いきなり「男も女も育児をやるべき」では男性にとって抵抗があるのかもしれないが、何かひっかかるなあ。『小林くんの育休日記』(のんぶる舎)を書いた小林成行さんのように「育児は楽しい。仕事サボれるし、気軽に育休

	共
学	
	家
庭	
	科
の	
	窓

石川 尚子

五、VTR利用の家庭科教育

(1) 百聞は一見に如かず

昔から伝わる言い伝えには、人生の機微をたくみに盛り込んだものが多いが、「百聞は一見に如かず」も、教育的観点から含蓄が深いことわざといえる。実際に試してみ、体験するというのはさらに効果的な学習方法であるが、今回は「見る」教材について考えてみたい。

「見る・聞く」教材すなわち視聴覚教材には、スライド、映画、VTR、OHPなどがあるが、スライドやOHPは音や動きがないだけに、教師側の力量が指導効果を大きく左右する。映画やVTRはその点、動きがあり言葉が入るので、子どもたちへ訴える効果も格段に増大

し、誰もが簡単に授業に取り入れることができる。

最近では、テレビ番組の録画、消費者センターや図書館などのビデオライブラリー、市販教材、企業製作のものなど、たくさんVTRが利用できる。また、ビデオカメラの性能アップによって、手軽に自作することも可能になっている。

(2) VTR教材を用いた授業

家庭科が学習の対象とする生活や家庭は、繰り返し述べてきたように多種多様である。しかし、教師も生徒も自分の体験の枠内でしか生活や家庭をイメージできないのもまた事実であろう。それを疑似体験できるのが映像教材である。VTRが異文化接触のひとつの媒体とすれば、子どもたちに与える衝撃は大きい方がよい。その意味で私自身の体験からひとつ推薦するとすれば、NHKの『人間はなにを食べてきたのか』シリーズの第一集、「一滴の血も生かす」をあげたい。

農耕民族、米食民族の私たちとはまったく異なる食文化を持つヨーロッパの人々の肉食文化を見せてくれるこのVTRには、考えさせるさまざまなシーンがある。天塩にかけて育てた豚をこく自然に屠殺し、塩漬け肉やソ

家庭科で利用できる市販VTR教材

ビデオ名と時間	内容、特徴	連絡先	価格(円)
消費者教育 全3巻 (各20分)	第1巻「装う」第2巻「食べる」 自立した消費者になるために正しい知識 と的確な判断力を身につける、すぐに役 立つ映像教材	教育図書株式会社 TEL 03-3268-5141 FAX03-3268-5180	69,000
楽しい食事のマナー (25分)	西洋料理・日本料理のマナーがワザにまど められ、映像を通してマナーが学べる		22,900
身の回りをみてみ よう(20分)	日常生活のごく身近なでき事を取り上げ 、ムダなものの購入やゴミ、地球環境や 資源についても考えさせる小学校用教材	日本消費者協会 総務室〒100 TEL 03-3553-8601 FAX03-3553-8986	15,450
家族(25分)	中学校の学習風景を通して、家族・家庭 について考えさせる中学校用教材		15,450
若者は狙われている (20分)	悪質商法の被害にあった高校生の事例を 通して、消費者としての心構えを解説		15,450
カード時代にそな えて(20分)	本格的なカード社会に備え、カードの仕組み利 用法など正しい基本知識が学べる		15,450
被服材料の種類	いくつかの実験を通して、衣服の素材の 種類と性質について解説されている		15,450
飾り切りのいろい ろ(30分)	飾り切りのコツをわかりやすく解説した 調理実習のための教材	榎一橋出版 TEL 03-3392-6021 FAX03-3332-7299	20,000
食物の歴史(30分)	旧石器から明治・大正までの食物の歴史		23,000
住居の歴史(30分)	竪穴式から超高層住宅までの住居の歴史		23,000
服装の歴史全3巻 (各30分)	服装のルーツ、服装のルネサンス、服装 の交差点、として展開される西洋服装史		各30,000
高齢者の生活と介 護(30分)	高齢者への日常の接し方と介護の実際を 映像を通して具体的に学ぶ		25,000
性教育シリーズ	ほどこから生まれてきたの?(22分) 大人になるってどんなこと?(26分) 生命誕生に関する謎の解明ビデオ	毎日EVRシステム ビデオ事業部 TEL 03-5252-4930 FAX 03-5252-4935	19,000 19,000 9,200
野菜一なせ(20分)	野菜の重要性と正しい摂取法のビデオ		14,000
子供の食生活と 健康(26分)	子供の不健康な食生活の実態と、その乱 れを直す地域ぐるみの実践を紹介する。 ごはんのはなし(16分)、さかなのはなし (15分)、おはしのはなし(17分)など。	農山漁村文化協会 TEL 03-3585-1141	11,330
たのしくたべよう たべものワザ			各15,450

(『新しい家庭科教育』教育図書より)

「セージにしてゆく暮らしのサイクル、一滴の血・一片の内臓までも無駄にしない加工技術の見事さ、そしてその一部始終を子どもたちに観察させる食の教育など。

それらを見て、生徒たちは気持ち悪がったり、拒否反応を示したりはするが、次第に文化の違いを認めていく。異文化をその背景と共に理解することで、新しいものの見方を体得して行くのではないだろうか。

(3)市販VTRの紹介
日本消費者協会、農文協や教科書会社などから発行されている市販VTRを一覧表にして紹介したが、その他、『NHK名作百選』、キッコーマン株式会社『中国の食文化』、味の素食品の文化センター『伝統食品の映像記録シリーズ』(当該センターでの視聴)、『放送大学ビデオ教材』なども一見をお薦めする。

私の大好きな国

カンボジア

ペン・セタリンさん

(聞き手／稲邑恭子・中村奏子
まとめ／稲邑恭子)



ペン・セタリンさんのカンボジア料理のお店は、JR町田駅南口の近く、小さなお店はいつも人がいっぱい、ふんわりと居心地がよい。華奢なからだから溢れ出るような陽のエネルギーと生き生きした表情にひきこまれて、思わず私もつられて動いてしまいそう。



ペン・セタリン

1954年ブノンペン市生まれ。'74年日本の文部省の国費留学生として来日、東京外国語大学付属日本語学校に入学。'81年東京学芸大学教育学部大学院修了。大和市・相模原市教育相談員、東京外国語大学非常勤講師。翻訳、通訳の仕事にも従事。

ペン・セタリンさんは小田急線町田駅近くにあるカンボジアレストラン「アンコル・トム」のオーナー。一九七四年、文部省の国費留学生として来日中に、ポルポト政権の下で、両親と、七人弟妹のうち四人を失った。通訳、翻訳、教育相談、救援組織のボランティアと多忙な日々の中で、祖国カンボジアの子どもたちに教材（副読本・文字の練習帳等）を送る運動に取り組んでいる。

*憎しみの教育ではなく

稲邑 カンボジア語の教科書を作って本国に送っていらつしやるとお聞きしましたが。

セタリン 一八八七年に十七年ぶりに帰国したとき、浦島太郎みたいだったんです。外国に来たみたい。プノンベンには小パリと言われたくらい綺麗な町だったのに、荒れて、ごみ箱みたいになっていた。

日本でカンボジア語を教えていたので、在日カンボジア人の子に何かいいテキストないかなと探していたのだけど、カンボジアは四派が支配していたでしょう。教科書は支配している地域毎に各派のものがあって、敵対し合い非難し合う内容だった。

プノンベンの文化大臣に会ったとき、「教科書がこれだと平和は来ません」と言ったら、「そうだね、だけど見たとおり、役所の中に人がいないから作れないんだよ」と言う。ポルポト時代に知識人を根こそぎやられたから、文化省でもゼロからのスタート。でも、いるのは大臣と門番だけで、役人がいないんです。給料が少なすぎるので、みんな外に行つてアルバイトしている。

「じゃ、私作ってみようかな」と言ったら、「作つて来なさいよ」と言われた。教科書はプノンペンにもあるけど、それはさっき言ったような政治的な部分を削つて、文章がほとんどないのね。「どこかの国のNGOが作ってくれたんだからしようがないでしょ」と大臣が言う。次に行つたとき、大臣が、「作つてくれたの、どこどこ？」と言うから、じゃあ本気で作らせてくれるんだ、この人達、と思つて、本格的にやりだしたんです。

講演会や絵はがきの収入を当てて、「日本語ーカンボジア語辞典」を二年前にめこん社から出して、定価は三千円だけど、カンボジア人からは千円もらつて資金にして、教科書作るのにお金かかるので、会を作つて、足りない分を郵政省のボランティア貯金からもらつたんです。

応援して下さるみなさんが地域のバザーをして下さって、三年かかって九百万円の目標が、二千三百万円集まった。小学校一年生用と識字クラス用の教科書です。

カンボジアでは先生達が作った教材があつても、お金がないので、本を出せない。みんな自費出版なのです。今のところはそういう識字教育の出版関係からやろうと思つて。学校の建物も不足しているんだけど、まだ、そこまで手が回らないんです。

もう、私ね、あんまり考えすぎて、尽きちゃつたの。物がたくさん入つてきたのに買う能力ないから、今まで虫も殺せなかつた人たちが、簡単に強盗して人を殺すのね。カンボジア行つたたびにそういうのを新聞で見る。だから、自分の作つた教科書見ると分かるのだけど、最初は、ちよつと堅苦しくて、道徳的で焦っている感じだったのね。これも教えなくちゃ、あれも躰なくちゃつて。ほんとに、最初はびっくりしたの。まるでごみ箱の国。だから、ゴミを拾おう、花を植えよう、つて。行く度に、少しずつ良くなっているから、あ、変わった、これはなくていい、と減らしていった。いまは結構柔らかくなつて、かわいい絵本のようなつた。

稲邑 カンボジアの人は穏やかで優しく、と聞いていたので、ポルポト時代のことが本当に信じられないような気がするのですが。

セタリン ポルポトの考えは、貧富の不公平をなくすために全部ゼロからやりなおそうと、悪いことした奴を憎もうと、憎しみの教育をしたの。農村の都市に対する憎しみをあおり、それで、お百姓さんたちはいまままで全然考えていなかったようなことを信じるようになったのね。

稲邑 セタリンさんのご本の中に、神様の話が出てくるでしょう。家の守護神の他に、それぞれ自分の守護神を幾つも持っていたりして、たくさん神様のいる社会つて、穏やかで柔らかくて、いいなと思つたんです。

セタリン 今は神様がないように思っている人が多い。アンコールワットは聖地だったのに、昔みたいにみんな思っていない。苦しすぎたのね。神様にお祈りして、何もならなかつたから信じられなくなつたんだと思うの。

* 国際学級

稲邑 国際学級のお仕事もしていらつしやるんですね。

セタリン 国際学級として行っているのは、大和市の下和田小学校、一回四十五分、年六回です。それと、妹が

平塚に住んでいるので、平塚でも呼びかけたら、三十人くらい集まったのでそこにも交代で教えに行っています。

国際学級の担当の先生は毎年変わるんですが、びつくりしちゃうみたいね。こんなのでいいんですか、つて。ふざけてもいい場所だから、賑やかで。子どもたちはストレスをぶつけて来ますから。でも、日本の子どもも、「ハロー」とか言ってくるの。興味があるのにもつたないなあと。

私なんか、二つの文化を知っているから、日本人が考えられないようなことを思いつけるときがあるのね。だから、日本の子どもたちも国際学級に来ればいいと思うのに、なぜ、カンボジア人の子どもだけ集めるんだろう。興味があれば、出ておいでと言えば、日本の子もカンボジアの子に勇気づけられて、もつと自分の国にプライドが持てるのに。カンボジア人同士交流させることしか考えていないのね。年一回ある「下和田ふれあい祭」でもインドシナ三国の子は自分たちの踊りを披露するのに、日本の子どもは何もしないの。いったいどういう事なんだろうと思うけど。

でも、まあ、先生たちも忙しくてそこまで考えられない

いですよね。その前はそんなことに全然興味が無かった人が、仕事で国際学級の担当になる。だから、知りたいとか、知ろうというより、とにかく「やらなくちゃ」つて感じなのね。だから、カンボジア人のこと、理解できない、何でそうなんだろうつて感じて、悪いことしか見えてこないようです。でも、そんなこと、先生に言いにくい。忙しそうだし。カンボジアの先生は、勉強さえ教えていればいいけど、日本では子どもの生活まで面倒見るんだものね。

子どもは、ご両親が行っていいよという子が来るんですが、両親が反対していて秘かに来る子もいるんです。下和田祭で民族衣装着せて踊らせるでしょ。私なんて、カンボジアいい国だよつていつも言ってるから、お母さんがどこか行ったすきに走つて来て、早く着せてつて言ってくるの、可愛かった。

この本（『私は、水玉のシマウマ』講談社）には書けなかったのだけど、実は、モニカも一年生の時、登校拒否したことがあった。「カンボジア人だから仲間に入れない」と言われたのね。モニカは隠していた。言った子に聞いたたら、保育園の時みんなそう言っていたという。

「じゃあ、〇〇ちゃんが外国に行つてそういうことされたら、悲しいでしょう」「ううん、私、外国人なんかならないよ」「じゃ、日本人だから混ぜないよと言われたら悲しいよね」。考えこんでいて、「そうね」。「じゃ、明日から、仲良くしてくれる?」と頼んだら、「分かった」つて。そのときから、その子が仲良くしてくれて、他の子も。

稲邑 保育園の先生から、日本語上達のために、「お母さんがカンボジア語で喋ったら絶対に返事しちや駄目だよ!」と言われていたことも、やつと八つになつてから本人から聞いた、と書いていらつしやいましたね。

セタリン そんなこともあつて、お母さん達も、自分の存在を消そうとしている人多いのね。私もモニカの苦しみも見てきたから、「なんだ、アイデンティティはないのか」、なんて言うことは言わないようにしている。私は、その苦しみがわからないんです。ポルポト時代にカンボジアにいなかったから……。

弟も名前を変えたんです。「何で名前を変える」つて怒つて、途中でまた変えさせたけど、だけど、もう一人の弟も私に何も言わずに変えて、変えてから言うので、

考えた。やつぱり私が理解できないことがあるのだろうと怒れなくなった。弟達も過去を消したかつたんですね。
*お友達になつたら親切

中村 在日朝鮮人の人は歴史的にずっと名前を隠してきて、それでつらい思いをした。インドシナ難民の人は最初から違う、日本人でないから、違つて当たり前存在として受け入れられるんじゃないかと思つたんですが。

セタリン そうね、日本人は最初の者には興味あるからインドシナの難民の人は最初は大事にして上げようつて社長が言うみたいね。

でもね、こういうことなの。例えば、この店にいても、私が電話に出て喋るでしょ。そうすると、自分に關係ないのに、「誰から、どういうことだつた?」つて店のカンボジアの人たちにいちいち聞かれるの。カンボジアの人は知りたがるのね。職場でも、大きい機械任される。そうすると、自分のために機械が止まつたらどうしようと思つて、心配して、大丈夫かつてしよつちゅう聞く。自分の国にはこんな機械ないから、いくら大丈夫と言われても、安心できない。

日本人は自分達の間では、「あれ」「これ」で簡単に

通用するのに、いちいち聞かれるから疲れるんですよ。何もお前と関係ないじゃないか、変な人、と言われたり面倒臭がられる。そうすると、カンボジア人のほうは、日本人は冷たいな、聞くだけで怒る、って。

稲邑 コミュニケーションが濃密なんですね。日本人は口に出さないうで察し合うけど、カンボジアの人はちゃんと口に出して伝えあう。感情もストレートに表現する。

私の友達で、韓国に行くと、エネルギーを全開できて生き生きするという人がいるけれど、そういう感じかな？
セタリン ううん、もうちよつと控えめかな。でも、日本人よりははつきり表現する。私も最初は、目立ちたがり屋とか、好き嫌いがはつきりし過ぎると言われたんです。日本人は何考えてるかさっぱりわからない。よく聞く話だけど、遊びにおいてと言われて行ったら、どうした？ 何の用？ って言われるって。私もいますごく日本人になつちやつたから、弟から電話来ても、どうした？と聞いてしまつて、どうしたのじゃないの、元気がつて言うだけだよつて、弟に言われてしまう。カンボジアでは電話がそんなに普及していないから、お客さんが、約束もなしに来る。それで必ずご飯を食べさせるから大変。

稲邑 女の人が全部やるんですか？

セタリン 女だけじゃない、男も作るし、お客さんも作るよ。日本の男は家のなかでは何もしないのね。仏像様みたい。退屈しないかなと思う。日本の男性は乱暴だなと思つた。お店やっていると、ヤクザになめられたりするときあるけれど、すごく腹立つて怒るんですよ。私は自分の国ではすごく大事にされたのに何で、って。カンボジアでは、女は大事にされるの。

家の夫は中国系なので、子どもに厳しい。大きくなつてもあれこれ指示する。子どもが熱出しても、私は休ませるのに、学校に行けという。カンボジアでは小さいときは厳しいけど、中学校になったら、親は何も言わなくなる。でも、子どもは私だけの子じゃないからね。

稲邑 親の価値観が違つて、異文化がぶつかりあうって感じの中で育つほうが、風通しが良くていいんじゃないかしら、子どもにとっては。

セタリン 異文化は接さないと分からないと思うの。子どもにアンケート取つたら外国人は怖いというのね。外見が逞しいので怖いのは当たり前、だから、仕事に行くかわりにその日の給料払つて、学校に来てもらつて、そ

の「怖い人」がどんなことをしゃべるのか、なぜ日本に来るのか、話してもらえばいいと思うの。とにかく接点がないとだめですね。具体的に誰かを知っていると違う。

稲邑 セタリンさんは、日本がお好きですか？

セタリン 好きですよ。合うんですよ。思いやりがあつてすごく優しい。誤解さえなければね、分かれば。表と裏があるようだけど、礼儀として、相手を傷つけさせないようにしているんだということさえ理解できれば。

稲邑 親しくなればいい、最初は冷たい？

セタリン カンボジアの社会と違って、秘密主義ね。例えば、入院しても人に言わない。人に心配させたりしない。カンボジアだと、人に言つて回るのに。

稲邑 水臭いつつていうのか。

セタリン うん、最初は不思議だけど、これも一つの社会のきまりだと思つて。入院を知らせないのはお見舞いもらうとお返しをしなくちゃならないからだと後から聞いて、それがあるから面倒臭いのか。そういうのなくせば、もうちよつとスムーズになるのと思つた。

稲邑 カンボジアにはそういう習慣はないんですか？

セタリン いいえ、やはり面倒臭い。もらつたら心配し

ちやうの。だからできるだけもらわない。

稲邑 日本人は赤の他人に冷たいんじゃないかしら。

セタリン それは感じますね。妊娠したとき、貧血で、よく電車で倒れたんです。でも、駅員さん以外は誰も何もしないの。お友達になったら、親切なのね。

稲邑 何かこれだけは伝えたいつてことありますか？

セタリン そうね、一人の人がやったことをすぐ、外人がやったとか一般化して言わないで欲しい。そういうふうに言うの、日本の人の癖みたいですよ。

◆「東南アジア文化支援プロジェクト」

の活動を支援して下さる方は、
東京1-549056宛にお振込下さい。

◆「カンボジア・タイ数字絵はがき」

(11枚セット)は1組500円、
10部以上400円です。

◆活動内容に関するお問い合わせは、

〒181 三鷹市下連雀4-15-1-301

☎0422(44)9147 鈴木さんまで。

◆レストラン「アンコル・トム」

〒228 神奈川県相模原市上鶴間2865

アルファビル2F ☎0427(44)4354

木を植えた日

—皇民国ニッポン

蒔田直子
カット／吉村美加

鍋底、油照りの夏が今年はいやに早くきた。盆地の底にぎらぎらと日が注ぐ午後は、真空の中を迷っていると日が注ぎに音がない。夕方ふつと真空の球がゆるみ、かすかな風を感じる頃、私は自転車の後ろにこんがり焼けて汗でとろけそうな希沙を乗せ、前カゴに山ほどの荷物を積んで、えつさえつさと帰ってくる。沙羅がまいた朝顔のツルが伸びたなと思つたら、夕方には壁一面に棚がめぐらしてある。路地には打ち水。みんな隣のおじちゃんのしわざだ。こ

の時間、朝鮮高校の生徒たちが通っていく。白いチヨゴリにプリーツのチマがひらひらと神社の抜け道に見えると思わずそつと追つて行つて視界から消えるまで立ってしまふ。昨日も今日もサッカー部の男の子がボディガードに就いていた。キヤツキヤツと笑いながら目礼して行つてしまふと、さあ、夕めしの仕度だつ、と私も家に入る。

私は四枚のチマ・チヨゴリを持つている。みんな濟州島から届いた。桃の花の刺しゅうのは自分の結婚パーティの時に着た。二枚めは朝天の村でみかん農家をしていたパクさんの姉が贈つてくださった。二度めの濟州行きはこの姉さんの墓参の旅になつてしまったから、形見の品だ。ピンクの紗に手描きの花、これは6年前に朴^{ハク}アボジの遺骨を埋葬に行つた時同行した私の父の見立て。父のロマンチックが形になつ

たもの。あと一枚は、朴兄貴の嫁さんから「私肥えたし、なおちゃん着てんか」と譲られたもの。どのチマ・チヨゴリを上げてもその時が浮かび、立ち現れてくる人の顔がある。パク一族のお祝事を除いて、私は原則的にチマ・チヨゴリを着ない。フワツと風をまとうようなチマ・チヨゴリを、「日本人の私」にこだわりなくただ嬉々として着られる時がくるだろうか。

半世紀以上の昔から、チマ・チヨゴリは、日本人が朝鮮人にいやがらせをする時のその標的になつてきた。オモ二学校で一世のハルモニたちに語り聞かされたのは、路上や人ごみの中で白いチマに泥や墨を投げつけられたこと。一九三〇年代は、朝鮮の植民地政策の中で「皇民化」の時代だ。一九三七年に日中戦争突入、この年の神社参拝の強要、翌年の民族服、朝鮮語の禁止。一

第二次朝鮮教育令が実行に移され、朝鮮半島で朝鮮語の教育が全面禁止された。朝鮮人の子どもが朝鮮語を話すと首から札を下げられ、気絶するまで体罰を加えられた。昨年亡くなった大韓キリスト教会の金在述長老も「朝鮮語で祈った」ことを理由に逮捕され、一夜で白髪になるような拷問を二ヶ月間耐えぬいた。天皇の戦争を敢行するには植民地の文化は抹殺されなければならなかった……53年前の京都でのこと。けれど、私は昨日恐ろしい話を聞いた。朝鮮初級学校の子どもたちが、バスの中で朝鮮語を喋っていたら中学生にとり囲まれて、「バスから降りろ」と脅されたそうだ。脅したのは、戦争中に教育されて頭の切換不能の年代ではなく、どこにでもいる中学生だったこと。あ、わかるとっさに感じ背すじが冷えた。全国で何百件も起っ

るチマの切り裂きも、老人がしていることではない。

あ、わかると感じたのは、二年前の事件を思い出したからだ。沙羅が二年生の時、自分でかじり始めたハングルを書いて大得意だった時期があった。

「こんなん書くんなら朝鮮学校行けや」



と8歳の子どもが言うだろうか。言うのである。筆箱がゴミ箱から出てきたり、ドロ靴が机の上のせてあつたりした。沙羅にそんなことをした中に、クラスのもう一人の朝鮮人、日本の名で通学している男の子もいた。沙羅は

すぐにカツとする親を知っていてなかなか口が重い。私は学校へ走った。教師は何ひとつ知らない。一ヶ月後、授業参観に行ったら、給食の当番表も壁に貼りだしてある絵も、沙羅の名前は全部ハングルに変わっていた。いつからですかと聞いたら、事件直後に「私

の名前、これから全部ハングルにしてや」と先生に書きかえさせたそうだ。私はなんにも知らなかった。イジメに加わった男の子の朝鮮名を聞き出して「本名呼び」で通しているらしい。いがぐりの悪ガキは、沙羅に呼ばれてデ

へへと笑っていた。たいした奴。でも私は悲しかった。8歳でこんなにつっぱらないといけないのかなあ。

「皇民化政策」の総仕上げは一九三八年の創氏改名である。「氏」は、今も昔も変わらぬ皇民簿「戸籍」の単位。

「改名」はもちろん日本風の名前に変えてしまうこと。半世紀以上の年季が入った日本名の強制は、朝鮮の名を名のれば明らかな不利益があるので今も続いている。友人は不動産屋を何軒回っても部屋を借りることができない。

日本にいるんだから日本の名使ったら、という不動産屋と、アメリカ人にもそう言うの？と論争するのはもう疲れたそうだ。私は静岡で育って19歳まで「朝鮮人」に会った記憶が全くない。

静岡市は在日朝鮮人の多い町で「いることを知らなかった」ことを知ったのは、ずっと後になってからのこと。朝

鮮人だとバレないように暮らさなければ危機がくることを当事者は知りぬいている。

今回の危機は「北朝鮮の核疑惑」から始まった。自分の国のプルトニウムがどうなっているのかわらされていぬ日本人が大騒ぎするのはヘンだね……と言っていたのもつかのま、さっそくチマ・チヨゴリ狩が始まってしまった。大韓航空機事件の時もラングーン事件の時もそうだった。北か南か、選んではいながらせをするのではない。バス停で立っていた女の子の髪をつかんでひき倒したり、罵声をあびせる事件が、京都市内だけで20件をこえた。現場に居合わせた日本人の誰一人として体を張って止めた者がいない。自分でもて余す憎悪は、黙認した奴らに向かっている。チマへの暴力には強制慰安婦の歴史に通底した陰惨さがつきまとう。

標的は女性と子ども。皇軍の国の暴力の歴史が日常の中でマグマのように噴き出すのを、自分らの手で封じられないのはなぜか。

6月6日、四百人の警官と機動隊が、最初から存在しなかった「国土利用計画法違反」という容疑をデッチ上げて、京都の総連本部と朝鮮学園を8時間も荒らし回った。建都千二百年祭の歴史に残る大失態だが、京都府警の国技という本部長は「まことに遺憾でありました」などと天皇そっくりのお言葉でまだ居座っている。この日から私はいよいよ忙しい。毎夜夕食をかきこんでとび出していくと、夕涼みしているおばあちゃんが「あんたはんも、おけんたい（公）のことがおありやして」と声をかけてくる。子どもたちのことをしっかり気にかけてもらっている。京都という町、何だかヘンな町ではある。

七月三日の朝日新聞の一面トップを「夫婦別姓を法制化」「非嫡出子の相続を同等に」という見出しが飾った。記事によると、「離婚の破綻主義」や「再婚禁止期間の短縮」「非嫡出子の相続差別の撤廃」「女性の婚姻最低年齢を男子と同じ18歳に引き上げる」などの方針はすでに固まった。また「夫婦別姓」も、導入方法についてなお議論があるものの、法制化することでは委員の合意が得られた模様だという。3つの試案が出されたが、C案（夫婦同姓とするが、相手の同意を得て戸籍窓口届け出ることにより、旧姓を自分の呼称とすることが可能）は、通称はあくまでも通称なので論外。A案（夫婦同姓を基本とし、別姓も選択できる。子どもの姓は婚姻時に決める）は、婚姻時に子どもの姓を決めるので、98%近い人が今同様に夫の氏を選び、妻だけが別姓という、むしろ性差別的な形を生み出してしまう。つまり残るのはB案（夫婦別姓を基本とし、同姓も選択できる。子の姓は出生時に両親の協議で定める）しかないが、B案にも決めるべき課題は多い。

正直言って、「ああ、またか」と思った。私の属する「夫婦別氏の法制化を実現する会」では、氏に対するこだわりで運動を始め、今まで5年間活動を続けてきたが、戸籍が内包する様々な差別的の芽を放置することができなくなった。私たちが「家制度」と呼ぶものの実態を生み出したのが、実は戸籍なのだということも知った。そのことは、別姓実現に必要な具体的な問題を考えていくと納得できる。何か一つを変更しようとするといモツル式にたくさんの問題に波及してしまうので、簡単には考えられないし、考えていくほどに巨大な戸籍の

夫婦別姓から戸籍制度変革へ

高木みどり

壁にぶちあたる。

かつて、両親の「早く結婚しろ」というプレッシャーが激しかった頃に、別姓の運動に出会った。当時、私と親友は、どこに行けば一緒に人生を歩いてみたいと思えるような他人に出会えるのか分からず、いろいろなところに元氣よく、出かけて行った。当時から、結婚するつもりはほとんどなかったけれど、「姓が変わることが既婚のマーク」みたいなのをなくすことは、シングルにとっても良いことだと思った。またちょうどその頃、職場の女性差別（女性にだけ課せられる単純作業やお菓子配りなど、女性として要求される様々な気配りにひどく自尊心を傷つけられていて、それを回復するために「女である私のために、何かをしなくては」と、いても立ってもいられない気がしていたのだ。

別姓の運動に関わる中で、いろいろ学んで楽しかった。そして「分籍（結婚と関係なく自分ひとりの戸籍を作ること）」しようと考えた。しかし出来なかった。何かの拍子に分籍したことを両親に知られ、痛烈に非難されたとき、自分がぐらつかないという自信が持てなかった。それで初めて「ああ、こんなふうに私は戸籍を通じて見張られているんだ」と気づいた。

別姓運動を通じて、私は、私らしく生きるために声を上げること、私を大切にするために他人を大切にすることを学ばせてもらった。この頃、子どもを産む代わりに、戸籍制度を少しでも良くして残せたら、次世代への素敵なプレゼントだと思うようになった。それも、一人ではできないところがいいと思っている。



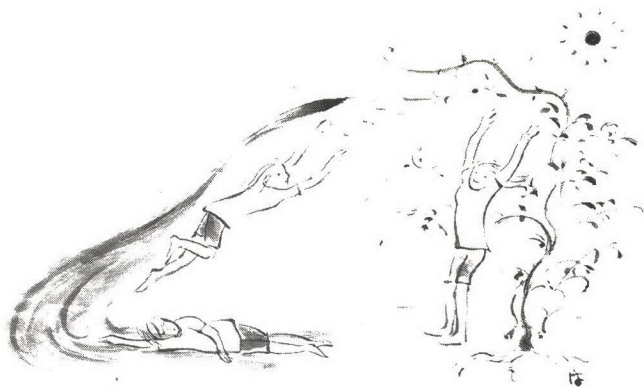
ききまの森から

文・井内好子
絵・中畝治子

暑いうだるような日々が続いています。

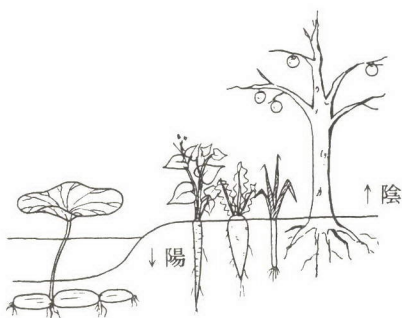
相棒は肉體労働で雨にうたれたように濡れた塩まじりのシャツをおみやげに「ビールが旨い」と喉を鳴らし、私は日中ぐったりしている犬に倣い、木々がそよがせてくれる清涼な風を追って過ごしています。

できるだけ元気に季節、季節をのりきりたい。でも健康であることを正しさとし、もう一方で病気は忌むものだとしてしまったら、病気に對してもからだに對しても失礼なことでしょう。というより病気とからだを分けていうこと自体がおかしなことですし、病気の多くはからだを浄化し、調整してくれている状態なのですから。例えばからだに合わないものや腐ったもの、毒のあるものを食べたとすると、健康なからだなら吐くことができます。吐けずに胃に入ってしまった毒も、腸が「吸収しない」と判断すれば下痢することができますし、腸が吸収してしまえば皮膚から出そうとします。吐くことや下痢、皮膚の荒れは病気でしょうか、健康でしょうか。こんなときに下痢止めを飲んだり、ホルモン剤入りの薬を塗ったりするのは、腸や皮膚に思考停止を命じて、正常に働くと言っているようなものです。熱が出るのも必要な反応を経過させるためのものですし、痛みもそこに気を集めて自然治癒を促進するためのものだと考えられます。病的な症状はすでに病気の解決に向かっているエネルギーであることが多いのです。自然治癒力を高め、解決を早めるものとしてさまざまな療法がありますが、からだの信号を聞きとり、病気にいかに協力するかということが大切なのでしょう。癌や脳出血、心臓病といった類いのものも、長年自分

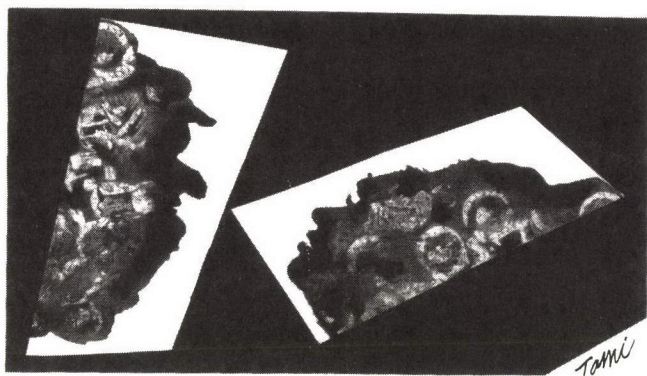


の生活の中で育ててきたものがほとんどです。「これまでの生活は嫌だ」と言っているからだの言い分を聞くか、それとも「これまでの生活を変えたくない」という言い分を聞くか、それもまた個々の生き方かもしれませぬ。

今回は、『アトピー料理ブック』（梅崎和子著／新泉社）から、陰陽の性質をうまく取り入れた調理法を紹介しましょう。煮炊きするとき、天に向かって伸びる陰性の性質をもつ食品を鍋のより下に、地中に向かう陽性の性質を持つ食品を鍋のより上に重ねて加熱します。この方法で調理すると、自然界とは逆に重ねられた生命が、炎の力を受けて本来の姿に戻ろうと交じり合い、それぞれのおまさを生かし合うので、調味料を多く必要としませぬ。この調味法は、「うまみの小宇宙」と称されていきました、なるほど。

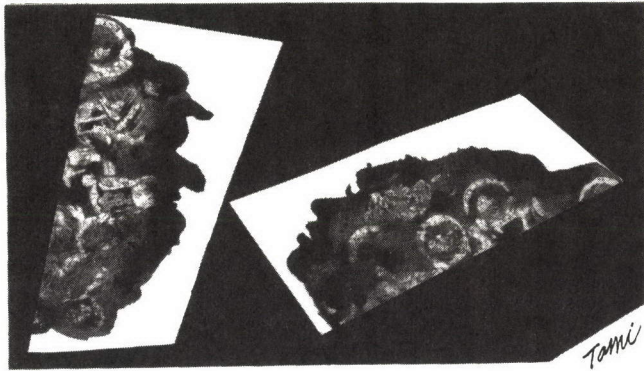


肉・魚・貝	
穀物	
根菜	
芋類	
葉菜・果菜	
きのこ・海草	



シルヴィア・プラスが二度目の自殺を図って、サイコセラピーを受けるようになった直接の原因は、夏学期に詩の勉強をしようと申し込みをしたハーヴァード大学から入学を拒否されたことだったといわれている。プラスに求婚していたイェールの医科大学生の男友達は、詩はゴミみたいなもので、結婚して子供が生まれれば詩など書かなくなるだろうと言ったが、彼はまた、夏の間のアルバイト先でウェートレスと付き合っていたことを告げる。その告白を、彼はあたかも自分の誠実さの証明のように考え、ウェートレスとの一時的な情事は取るに足らないことで、プラスとの関係に影響を及ぼすようなものではないと信じている。プラスがこの男との結婚をやめたのは、彼への不信ばかりでなく、男のダブルスタンダードを許容する社会への嫌悪からであり、詩を書いていこうという決心は、自分はそのような場所には住まないという、社会への決別の意志であった。だから、ハーヴァード大学からの拒絶は、よけいプラスにこたえたのだろう。

たしかに、大学の夏学期に入れなかったからといって自殺を図るのは大げさ過ぎるかも



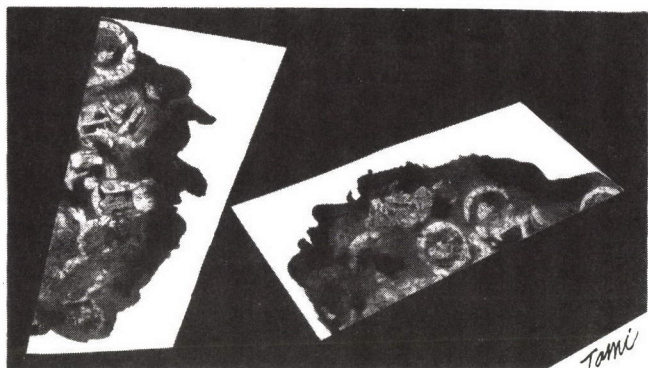
しれない。しかし、学校の成績がいつも一番で、スミス・カレッジも優等生で通したプラスは、それだけ大学での勉学に期待をかけ、また、そこでの勉強が詩人としての成功をもたらしけると信じていたのだろう。プラスの母親は、大学教授の夫に死別してから、タイプや速記を教えながら子供たちを育ててきた。成績優秀な娘のプラスに期待をかけ、やがて有名な詩人、そして大学教授になるだろうと、いつもプラスを励ましていた。

プラスにとって、大学は社会からの避難場所、つまり、詩も女性も認めない俗世界の対極的な場所として幻想されていたのである。

ところが、長い間、大学は男たちの独占的な居場所だった。プリンストンやイェールは一九六〇年代の終わりまで女子学生を入れなかったし、プリンストンは大学院にも女子を入れなかった。私は一九六一年に大学院に申し込みをしたが、女性はいれませんというプリンストンからの返事を今でも持っている。先日、来日した詩人のアリシア・オストライカーは、女性の教員は採用しませんというプリンストンからの手紙を、私と同じようにやはり今でも持っていると言っていた。『自分一人の部屋』のヴァージニア・ウルフが、二十世紀初めのケンブリッジ大学で感じたことは、アメリカでも一九六〇年代の終わり頃までの現実だった。

日本の教育が性差によるダブルトラックを敷いていたことや、女性が国立大学へ進学できるようになったのは第二次世界大戦後であったことなどは、周知のことである。しかし、男女共学が進み、女子の進学率の伸びが男子を上回った現在でも、大学は、女子大をふくめていまだに、たとえ独占的ではないにしても、特権的に男性の居場所である。

ひところ流行った女子学生亡国論は、真剣な学問は女子になじまない、女子は大学に学



問をしに来るのではなく、せいぜい教養を身につけに来るといふ俗説、通念を普及させ、浸透させた。一方、女子学生が多いと就職の心配をしなくてよいというのが、大学側の言いぐさだった。女子学生のほとんどが就職志望になったのは、つい最近のことだ。また、女子の進学率が伸びたと言っても、四年制への進学はいまだに短大への進学を下回っている。企業にとっても短大卒業生のほうがありがたい。給与の安い、若いときに下働きをしてくれて、結婚すれば退職してくれるからというわけである。だが、昨今の不況時、その短大生すら門前払いを食わされている。男女雇用機会均等法があっても、企業は女性を採用しないと言って憚らない。

今年、学術振興会議は、女性の研究者養成のために、大学や国の効果的な施策を急げと提言した。女性が研究者として仕事するための環境整備は急務だし、文部省の科研費など、さまざまな補助金、研究費を得る機会が女性に少ないことも是正を要する。国立大学に女性の研究者（助手から教授まで）は極端に少ないが、私立大学もまた同様なのである。

しかし、女性にとって大学が居心地が悪いのは、もっと根本的に、学問研究が権威と不可分に結びついていて、そこには女性の場所がないためだ。大学は社会の権力構造を反映しているのに、社会の聖域としての学問の場とする伝統が、変化を嫌い、自浄作用が機能しない体質につくりあげてきたのである。女性の研究者志望者が少ないと、今頃になって国や学会が慌てるのは、女性の労働力、能力がすでにビルトインされた先進国社会の中で、女性の参加しない日本の学会が著しい人材不足、研究水準低下状況に陥ろうとしているからなのである。

一年生のくせに!

学校祭準備の押し迫った頃、自分のクラスの娘たちが集団で、一人の一年生を取り囲むという事件がありました。

この一年生は、良くも悪くもとびきり元気のある子で、パーマをかけていました。「パーマをとるように」と、「指導」をしていたというのです。

ところが、「指導」している彼女たちもパーマがかかっているのです。ようするに、「一年生のくせに生意気だ!」ということのようです。

じつは、この前日に一年生とトラブルを起こすようなことのないように話したばかりでした。注意した矢先の出来事だったので、一人ずつ呼んで、話を聞きました。

すると、口をそろえて、「集団で囲んだのは悪いと思う。でも!」。自分



江口凡太郎

たちは一年生の時、先輩に許してもらえなかったから我慢したというのです。「自分たちも悪いが、一年生も悪いんだ」という論理です。

「高校生にふさわしくない」ということで、パーマは校則で禁止なのですが、彼女たちの間では、「一年生にはふさわしくない」ということで、禁止した

かったようです。

「先輩としての」自分たちの「存在」をこういうかたちで主張しようとする行動傾向が気にかかります。

おとなから見ると貧困な発想ながら、彼女たちには、校則や先生の注意なんかよりずっと重要な意味をもつ、生徒間の「暗黙の規則」があるようです。

自分たちは守れたが、今の一年生は守っていない。「何事だ!」という彼女たち、高校生のくせに何事だ、といっても指導する教員。今回のことも頭髪指導と無関係とは思えません。

それから数日後の学校祭前日に、同じメンバーがまた同じ生徒をトイレで取り囲んでいたことがわかりました。

一人ずつ話を聞いて、事実であれば特別指導になり、学校祭どころではありません。彼女たちは祭事ではクラスを引っ張る主力メンバーです。(続く)

Weの屋台村

クラスの半分は男子である。家庭科の先生の熱意がピンピン伝わってくる気配を、娘の話から感じます。

娘の話から、どうも、その家庭科の先生は「We」の読者じゃないか、と感じることがよくあるのですが。また何か、興味ある話を娘から聞けば、伝えたいと思います。

(藤原美和子・兵庫・四〇代)

☆「We」は、「家庭科の雑誌」と思っていたのですが、非教員の方の意見が屋台村にはあって、うれしく思っています。

私はまだ採用試験には受かっていないのですが、家庭科を高校生に教えています。教師という職業は専門家とっています。早く家庭科の専門家として、また「We」の中心をいろいろな形で伝えられるよう、私も頑張りたいと思っています。Weの役に立てれることがあれば、お手伝いさせて下さい。(採用試験が終わってからになると思いますが…)

(道上広子・大阪・二〇代)

☆この春、娘が、兵庫県立高校に入学した。家庭科男女共修開始の輝かしい年である。

☆「We」は、新聞に紹介されたのを機会に購読していますが、感じ方や生き方に共鳴するものがあり、私の周辺にいる人にはない刺激を受け、おもしろく読ませていただいています。でも、読者の開拓は、かなり大変。「この小さな雑誌に、年六千円!」という主婦感覚の人ばかりだから。

(中村あつ子・長野・四〇代)

☆私は母親と二人でニコミやっているのですが、母の発案で、創刊号から毎回、アンケートをまとめる形式十二人で原稿書いて十ひとの原稿もらえたらのせる、というパターン

です。こんど二三号になります。

読者参加という意味では、屋台村のようなページを関東発でも二―三ページ設けて、読者が書いておくアンケートをハガキでいどではさむとかどうでしょう。私などは今くらの紙の方がありがたいですが、ハガキ大くらいなら、もっと気軽に書いて出せるのでは…と思います。ウラとオモテ半分つかえば、ハガキも結構書けますし…。

(L・大阪・女・二〇代)

☆現在は無職ですが、しばらく非常勤で高校に勤めていました。現場で感じたことは、みんな勉強しないということでした。

毎年同じことを同じように教え、ひまがあったら自分の子どもの服やあみものなどして、本当に腹がたつ思いでした。

男女共修で教壇にたつ時間が長くなれば、それらも否応なくかわるとは思いますが…。本当にどうしたらいいのでしょうか。

Weを読む先生が増えてほしいですね。折

角の時が来たのですから。

(若井克子・栃木・四〇代)

☆香川県では小学生は、制服という名の標準服を着なければならぬ。ゆえに入學時点で体操服、給食の服装などで四〜五万はかかる。中学校にいたっては、体操服を入れる手つけかばんまで、お揃いでないといけないらしい。

少なくとも義務教育の間だけでも「制服」というものは、なくてはほしい。第一に、お金がかかりすぎる(それに合繊一〇〇%だ)。

第二に、個性に合った教育といった今の風潮に逆行している。さらに、気候に合わせた服装ができない。

中学・高校での服装検査などにエネルギーを注ぐひまがあれば、もっと教材研究に力を入れると『言いたい!』

(Y・S 香川・女・三〇代)

☆団塊の世代として、結婚式、入籍を拒否

し、家族を泣かせて貰った夫婦別姓の二十年でした。

その間に三人の子どもを産み育て、事実婚から旧姓使用へと変わりましたが、子どもの学校で、児童・生徒と母親の別姓は、千人を越える規模の学校でも、いつも一人でした。

様々なあつれきもありました。法制化されたら、少しは、やり易くなるかもしれませんが、常に圧倒的に少数者でした。名乗りをあげない実践者は(私や友人のように)、潜在的に、かなりいる事をお知らせします。

(矢口峰子・埼玉・四〇代)

☆あたしが今、関わっていること。(カンパが欲しい!)

①Sexual harassment 裁判の支援二〇。

②住民票統柄裁判を支援する会一つ。

③マスメディアのあり様をクリティカルに視聴する会一つ。

④強制異性愛社会に対する糾弾。

⑤その他いろいろ↓いそがしいけど、けっこう

うのんびりやってるから、楽しいよ!

(高橋七重・東京・三〇代)

☆二十代〜三十代は子育て、四十代は本当に充実した仕事ができた、五十代、親の面倒が肩にかかる、自分の体力のおとろえが気になる。

「女の一生」って…を考える今日のごろ。自分の老後を真剣に思います。そして、死を迎えるときの、死のむつかしさも考えています。(S・I・兵庫・女・五〇代)

☆今、老人福祉の中で、さまざまな問題を法的に考えなければならぬと、痛感しています。(橋本幸子・兵庫・女・七〇代)

Weの屋台村ますます快調!

Weの屋台村のページは、読者のみなさんの自由な意見をそのまま載せています。こんな意見が聞きたい、こんなアンケートと取ってみたら、という声をどしどし「We関西編集室」(〒657 神戸市灘区上野通七の一の四 吉田 清彦 方)にお寄せください。

◆猛暑のせいだろうか、体の調子がいまひとつ。目はかすむ、耳はボワーンと聞こえにくい。しかし生意気な子供達が少しばかり可愛く見えたりして……。毎日のことだから困ることも多いけど、案外落ち込むだけでもない。自然と自分勝手な見たり聞いたりをやってしまうので、私にとっては好都合。イライラすることも減った。時には思わぬ失敗で息子達に非難されたりもするが……。ぼんやり飄のかかったような日常って捨て難いけど、やっぱり医者に行こうかな。(有坂)

●自分の父親が戦争で何をしたのかを確かめるために、アメリカから返還されたナチスの情報を手がかりに、父の働いていた収容所に行く息子とその父を追ったドキュメンタリーを見て、ドイツの人たちにとって戦争責任とは一人一人の生き方の問題なのだと言われた。従軍慰安婦に補償はしないという発表への抗議の署名を頼んだら「税金が上がらないなら…」と冗談のように言われた。でも、一人一人が増税してでも負担すべきものもの、と思いつつ言えなかった。(中村)

♥青春真っ只中の学生同志で出会ったSさんは在日朝鮮人であった。大学卒業後日本の外食産業のトップ企業に入り、「同期入社の日本人には絶対に負けられない」と異常なまでの闘志を燃やし出世の道を歩いていった。多くの人を敵に回して……。その頃の私にはSさんの『日本人に対するこだわり』が何なのか理解しきれなかった。毎回、蒔田さんの原稿を打ちながら、少しずつではあるがその気持ちがわかるようになった。今、彼はどんな人生を歩いているだろうか……。 (野瀬)

♣戦争という非常時にあって、人を人とも思わない行動に駆り立てられてしまう人間と、思いやりを失わない人間の違いはどこからくるのだろうか、と考えてしまう。下田治美さんのエッセーに、息子がいじめに会い、いじめた相手の母親と対決する場面があるのだが、その母親を前にして結局彼女が言った言葉は、「お父さんを幸せにしてあげて下さいよ」というものだった。憎しみや恨みは何よりもその人自身を蝕む。戦争責任を感じない人間を、何てヤツだと思っけれど…。(河村)

★今月号は期せずして(いつもほとんど直観と成り行きに身を任せて企画。決断できない時は易を勉強中の河村さんのサイコロに頼ります)、東南アジアの温かさが浮かび上がった感じがしました。石名さんと「河の民はやさしい」という話をしていて、河の民は自然から助けてもらって生きるから多神教、砂漠の民は自然と対決して一神教なのかと妙に納得。私はどうも、一人一人守護霊が違おうとか、一人にたくさんの神様がいてるとか、そういう世界が好き。(稲邑)

■5社7種類の家庭科教科書の内容から男女共に学ぶ家庭科にふさわしい表現や記述を選び、紹介したリーフレット「イメージ一新! 共修の家庭科教科書」ができました。(1部200円・送料270円)

お申込先は渋谷区代々木2-21-11 市川房枝記念会館内「家庭科の男女共修をすすめる会」まで。

■12月号「食から見える世界」、1月号「はたらくということ」、2・3月号「フェミニズム'95」の内容を企画中です。投稿、執筆者の推薦など歓迎します。(編集室)

くらしと教育をつなぐ—We

Vol. 3 No. 5 1994年8月15日発行

定価600円(本体583円)

年間購読料/定価6800円(送料共)

発行/Weの会 編集/稲邑恭子 河村ふみ 中村泰子

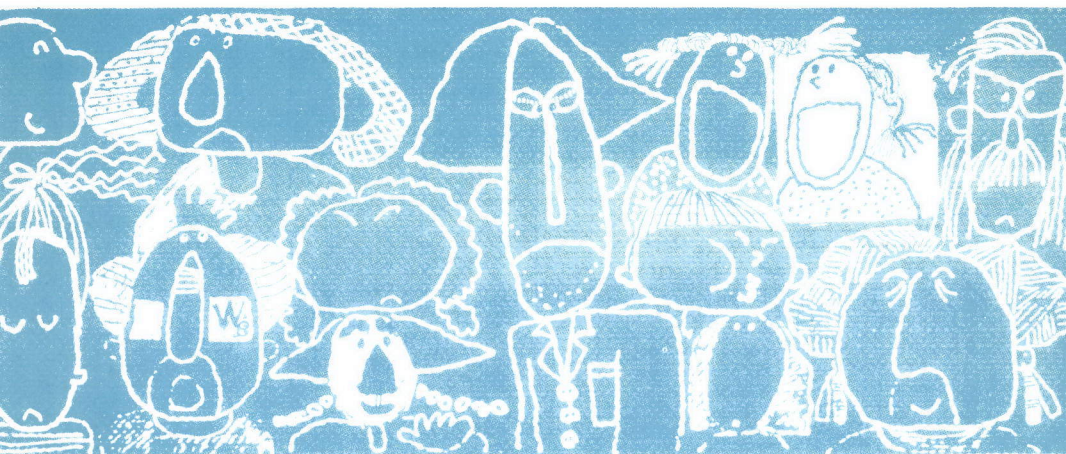
〒225 神奈川県横浜市緑区市が尾町1161-8

共学舎内 ☎・FAX 045(974)3101

郵便振替 東京3-754314 WE編集室

三菱銀行 大久保支店 普0264724

印刷/(有)イー・エム・ピー 11400区飯田橋2 5 2



くらしと教育をつなぐWe 1994年8月15日発行 第3巻第5号
定価600円(本体583円 年間購読6800円送料共)
郵便振替 東京3-754314 WE編集室